

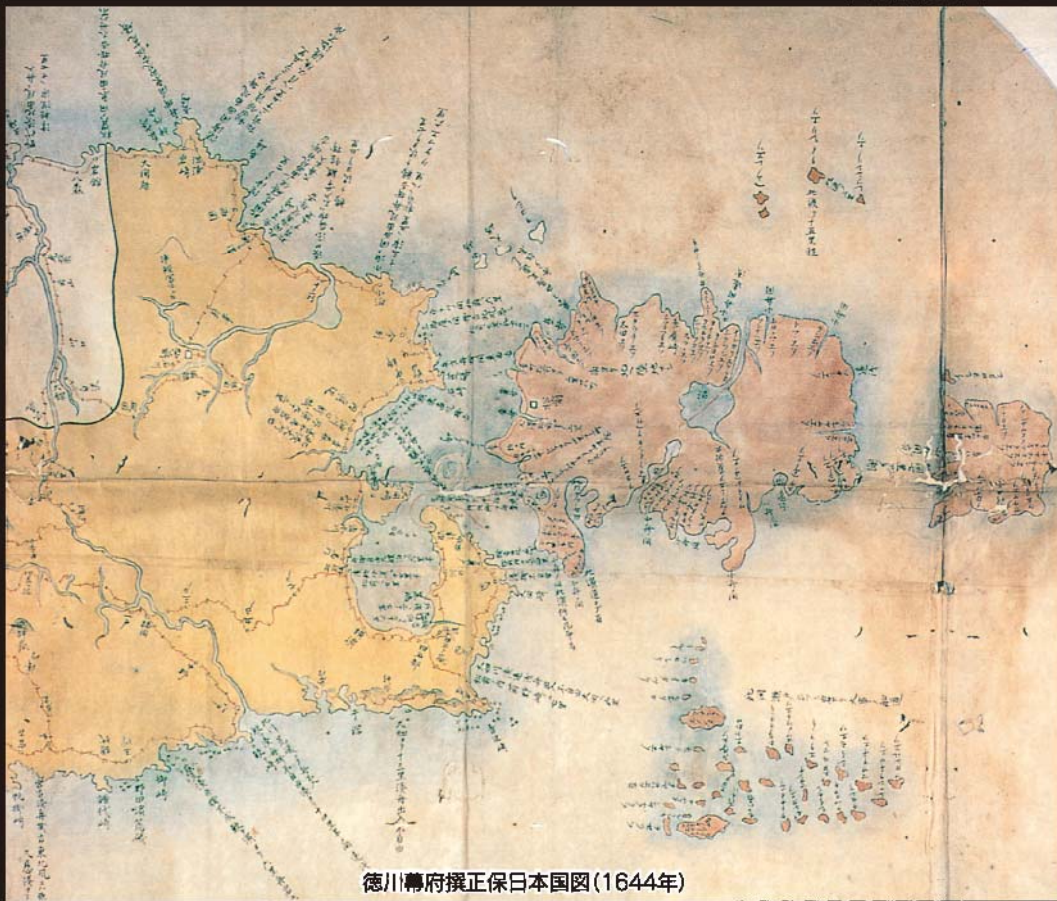
元島民の訴え

平成 23 年 度

北方領土の早期返還を求めて

第22回「元島民の北方領土を語る会」集録

日本が北方領土の返還を要求するのには歴史的・国際法的に正当な根拠があります。



徳川幕府撰正保日本国図(1644年)

主 催／外 務 省

実施団体／社団法人 北方領土復帰期成同盟

も く じ

1	平成23年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱	2
2	平成23年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況	3
3	「元島民の北方領土を語る会」元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて	
	○ 北方領土返還要求運動について 北方領土復帰期成同盟	4
	【北海道会場】	6
	○ 志発島元島民二世 本 田 幹 子	
	○ 水 晶 島 元 島 民 吉 田 義 久	
	【京都府会場】	11
	○ 志発島元島民二世 宮 脇 田 鶴 子	
	○ 志 発 島 元 島 民 児 玉 泰 子	
	【栃木県会場】	22
	○ 志発島元島民二世 神 林 美 砂	
	○ 択 捉 島 元 島 民 三 船 志 代 子	
	【埼玉県会場】	31
	○ 国後島元島民二世 白 崎 賢 哉	
	○ 多 楽 島 元 島 民 河 田 弘 登 志	

1 平成23年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱

1 趣 旨

択捉島、国後島、色丹島及び歯舞群島からなる北方四島は、我が国民が父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかつて一度も外国の領土となったことのない、我が国固有の領土である。

1956年、日ソ共同宣言が署名され、両国間に国交が再開されてから既に60年以上が経過した。この間、我が国は、両国間の最大の懸案である北方領土問題を解決して平和条約を締結することにより、我が国の重要な隣国との間に真の相互理解に基づく安定的な関係を確立するという基本方針を一貫して堅持し、粘り強くソ連及びロシアに働きかけてきているが、未だ不法に占拠された状態が続いている。

領土は国家、国民にとって基本的な問題であり、今後の日露関係を真に安定的なものにするためには、是非とも北方領土問題の早急な解決が必要であり、そのためには、北方四島が当然我が国に帰属している領土であることについて、国民一人ひとりが正しい認識を深めていくことが重要である。この観点から、北方領土元島民及び元島民二世が自らの体験を通して北方領土が我が国固有の領土であることを訴え、北方領土問題の早期解決を目指し一層の国民意識の高揚を図る。

2 主 催

外 務 省

3 実施団体

社団法人北方領土復帰期成同盟

4 後 援

社団法人千島歯舞諸島居住者連盟、全国地域婦人団体連絡協議会

5 開催時期・場所

開催時期	開催地	開 催 団 体	開 催 場 所
7月8日(金)	北海道	北海道女性団体連絡協議会	函館市民会館
7月26日(火)	京都府	京都府連合婦人会	京都府男女平等参画センター
10月28日(金)	栃木県	栃木県地域婦人連絡協議会	栃木県婦人会館
11月30日(水)	埼玉県	埼玉県地域婦人会連合会	彩の国すこやかプラザセミナーホール

6 開催内容

(1) 説 明

内 容 北方領土返還要求運動について

説 明 北方領土復帰期成同盟 (10分)

(2) 元島民の訴え

テーマ 北方領土の早期返還を求めて

内 容 北方領土の戦前の模様、ソ連軍の侵攻、強制引揚げ、返還運動取組状況、北方領土返還に向けた決意等について訴える

語り手 北方領土元島民二世 (20分)

北方領土元島民 (40分)

7 開催方法

4の開催団体が各種の大会、研修会等を実施する際にこれらの行事のプログラムに繰り入れて開催する。

2 平成23年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況

開催月日／開催都市 開催団体	参加者 (人)	語り手 出身島	プロフィール
7月8日(金) 北海道函館市 北海道女性団体連絡協議会	50	吉田 義久 (74) 水晶島	職 業 行政書士、建築設計士 昭和12年8月 水晶島生まれ 昭和20年8月 終戦により本土へ引揚げ 昭和60年4月 (社)千島歯舞諸島居住者連盟富山支部長に就任 昭和60年5月 (社)千島歯舞諸島居住者連盟理事に就任 昭和60年6月 (独)北方領土問題対策協会評議委員に就任
		本田 幹子 (54) 志発島(二世)	職 業 自営業 昭和32年10月 根室市生まれ 平成9年2月 志発島青年部事務局員 平成18年10月 たんぽぽ設立 平成19年4月 (社)千島歯舞諸島居住者連盟根室支部理事
7月26日(火) 京都府京都市 京都府連合婦人会	80	児玉 泰子 (67) 志発島	職 業 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長 昭和19年10月 志発島生まれ 昭和22年秋 強制送還 昭和52年 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長に就任 平成8年 総務長官表彰「北方領土返還要求運動功労賞」受賞 平成21年 (社)千島歯舞諸島居住者連盟理事・関東支部長
		宮脇田鶴子 (64) 志発島(二世)	職 業 教室講師 昭和22年4月 中標津町生まれ 昭和44年4月 トヨタカローラ釧路(株)入社 昭和46年4月 根室生産農業協同組合連合会勤務 平成18年5月 財団法人中標津町文化スポーツ振興財団理事 平成20年3月 根室生産農業協同組合連合会 退職
10月28日(金) 栃木県宇都宮市 栃木県地域婦人連絡協議会	110	三船志代子 (73) 択捉島	昭和13年9月 択捉島薬取生まれ 昭和22年 強制送還 昭和32年 根室生産農協連勤務 平成13年 「四島(しま)とわたし」絵本コンクール最優秀賞
		神林 美砂 (50) 志発島(二世)	職 業 会社役員 昭和36年 根室市生まれ 昭和61年 東京たばこサービス(株)入社 平成11年 (有)ジンアドバタイジング設立
11月30日(水) 埼玉県さいたま市 埼玉県地域婦人会連合会	80	河田弘登志 (77) 多楽島	職 業 団体理事 昭和9年9月 多楽島生まれ 平成20年11月 引揚げ 昭和33年 根室市役所勤務 平成7年5月 (社)千島歯舞諸島居住者連盟監事 平成9年5月 (社)千島歯舞諸島居住者連盟理事 平成12年 (社)千島歯舞諸島居住者連盟根室支部長 平成23年4月 (社)千島歯舞諸島居住者連盟根室支部理事
		白崎 賢哉 (56) 国後島(二世)	職 業 別海町役場職員 昭和30年1月 根室市生まれ 昭和54年5月 別海町役場奉職 現在に至る

3 「元島民の北方領土を語る会」

元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて

北方領土返還要求運動

北方領土返還要求運動について

北方領土復帰期成同盟

本日はお忙しいところ「元島民の語る会」ご出席頂き、ありがとうございます。

また、皆様方には日頃より北方領土返還要求運動にご尽力頂き厚くお礼申し上げます。

「元島民の語る会」は、元島民や二世の方から、北方領土での生活や現在の四島の様子を語ってもらい、北方領土は、私たち日本国民が父祖伝来の地として受け継いできたことを再認識するとともに、北方領土問題の喚起・高揚を図るという目的で毎年、道内外において実施しております。

当北方同盟は、皆様ご承知のとおり、北方領土返還要求に関する国民世論の啓発と結集を図るとともに、我が国の正しい主張を広く国際世論に訴え、平和的に北方領土の返還を促進することを目的としており、昭和40年4月に外務大臣許可の公益法人となり、現在に至っております。

皆様には、もうご存じかと思いますが、ここで、北方四島について少しご説明したいと思います。プログラムの裏表紙をご覧ください。

ここに択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の地図が描かれております。

この四島それぞれの面積は、択捉島3,184平方キロメートル、国後島1,499平方キロメートル、色丹島253平方キロメートル、歯舞群島100平方キロメートルで、4島合わせて5,036平方キロメートルあり、大変大きな島です。

北方四島は、第二次世界大戦の最中、日本

の降伏直前にソ連が中立条約に反して参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に不法に占領したことが、北方領土問題の始まりです。

ソ連は、アメリカに「日本がソ連に降伏すべき地域に、全クリル諸島を含め、北海道の一部、釧路と留萌を結ぶ北海道の北側を付け加えるよう」修正を求めましたが、アメリカは全クリル諸島の占領を容認しましたが、北海道の北半分の占領は認めませんでした。アメリカが全クリル諸島に対する修正を認めなければ、アメリカの占領下に入り、沖縄と同じような対応となったかもしれません。

この不法占領に対し、その年の12月1日、当時の根室町長^{あんどういしすけ}安藤石典氏が、連合国の最高司令官マッカーサー元帥に「北方四島は、古くから日本の領土であり、米軍の保障占領下において、住民が安心して生業につくことの出来るようにして欲しい」という旨の陳情書を提出したことが、返還要求運動の始まりでございます。

北方領土が返還されないことは、我が国の主権を損なう基本的な問題であり、政府においては「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、精力的に外交交渉を続けてきております。

北方同盟では、関係機関、団体との連携を強化し返還要求運動に取り組むとともに、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととして

おりますが、北方領土が不法占拠されて65年、返還要求運動は長期に及び、運動関係者の高齢化が進んでおります。また、高齢化とともに活動の低下や、運動の形骸化が危惧されております。

引き続き返還要求運動を推進するためには、若い世代の方々に北方領土問題を正しく理解してもらい、返還要求運動を引き継いでいくことが大切であり、後継者育成が重要な取り組みとなっています。

最後に、北方領土、いわゆる択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところ です。北方領土問題は、今日お集まりの皆様方をはじめ、全ての日本国民の問題です。どうか、そのことを忘れないで何かの折に思い出して下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

【北海道会場】

- 開催日時 平成23年7月8日(金) 10時10分～12時00分
- 開催場所 函館市民会館
- 開催団体 北海道女性団体連絡協議会
- 参加者 50名

元島民二世の訴え



北方領土の早期返還を求めて

志発島元島民二世 本 田 幹 子 さん

私は根室から来ました本田と申します。根室と函館は、北海道の端っこ同士で距離が遠く、訪ねる機会はあまり無いのですが、現在は姪が函館に住んでいることもあり、つい先月も観光に来たばかりです。北方領土の開拓に活躍した「高田屋嘉兵衛」とも縁が深い土地ですし、観光名所がたくさんあり、様々な歴史がある本当に素敵な街だと感じましたので、今回のお話をいただいた時とても嬉しくてすぐにお引き受けしました。

私の母は、歯舞群島の「志発島」出身の元島民です。母は、私が子供のころから「北方領土返還運動」に参加していました。家でも、島に住んでいた子どもの頃の事や、島から引き揚げて来た時の事など色々な話をしてくれました。

根室には、たくさんの元島民が暮らしていますが住んでいた島、引き揚げの状況などは様々です。戦争以前は、四島を合わせて17,000人以上が住んでいました。中央から遠く離れた田舎暮らしでしたが、海からの恵が豊富で穏やかな暮らしをしていたそうです。

それがある日突然、銃を持った大きなロシア人が土足で家に入って来て、略奪を繰り返しました。「銃で撃たれて亡くなった方もい

る」と聞き、母の家族はソ連兵に気付かれないう、夜に漁船で根室まで逃げて来ました。同じように、船で脱出しようとした人たちの中には、嵐に遭って家族全員が亡くなった人達もいるそうです。

島に残っていた人達は、それから2年間ソヴィエトの統治下で生活した後、荷物同然の扱いで貨物船で日本に送られました。帰って来る途中に、船の衛生状態の悪さや栄養失調などで亡くなった方もたくさんいるそうです。樺太経由でこの函館に降ろされ、そこからあちらこちらへ散らばって行きました。元々島と根室とは行き来していたこともあり、まず「近くに居れば、いつでも島に帰れる」と言う思いから、根室にはたくさんの方が移り住みました。しかし、その頃根室も空襲で焼け野原になっていたため、頼れる人もほとんど無く全ての財産を奪われ、裸同然の元島民は本当に大変な苦勞をしたそうです。

終戦後すぐの昭和20年12月には、当時の安藤根室町長によって「北方領土返還運動」の素となる動きが起きました。それ以来、ずっと「返還運動原点の地」として様々な活動を行っています。

私達2世は「何とか母を、父を島に帰らせてやりたい」と思い活動していますが、戦後66年経っても一向に島が還って来る気配すら無く、元島民の半分以上の方が他界し、平均年齢は76歳を超えました。82歳になった私の母も、もう認知症のため自由訪問や墓参にすら参加出来なくなっていました。そのため、返還運動も私達2世が担う活動が増えています。

根室では、様々な北方領土の住民大会やイベントがありますが、やはり元島民は減って行く一方なので2世の参加が必要です。その他に、札幌雪まつり会場や根室の「さんま祭り」「カニ祭り」の会場などでの署名活動も2世の仕事です。

私も署名活動や、こうして“語り部”をさせて頂いて各地の方々に元島民の気持ちを伝え続けています。しかし、私も40歳までは子育てや義理の母の看病などもあり、仕事も返還運動もしていませんでした。40歳になって、子どもたちも手が掛からなくなった時、ひょんな事から民放テレビ局の委託カメラマンをするようになり、今年5月に引退するまで14年ほどニュースの取材をしていました。その間、毎年繰り返される大臣達の領土視察や返還運動の現場などを何度も取材しました。たくさんの元島民にインタビューもしました。元島民の悔しさ、悲しさを痛いほど感じました。そして返還運動に参加するようになりました。

ビザなし交流などにも参加するようになりました。4年ほど前からは“たんぼぼ”と言う団体を作り、ビザなしで根室へ来るロシア人との交流を続け、毎年7月に来る島の青少年の訪問団に食事を作るサービスなどもしています。元島民の悔しさを感じながら、ロシア人と交流することに矛盾を感じる人もいます。でも交流を続けて20年が経ち、初めのころには考えられないほどお互いに理解が進みました。返還はお互いの政府が決めることで、私達が直接関わることはできません。

ロシアは「北方領土は戦争の結果勝ち取ったもの」と主張し、子どもたちにも教育しています。

でも、私は信じています。民間人であっても、私達が本当に理解し合い真心を持って付き合い、深い信頼関係が築ければきっと「日本人は嘘をつかない、正直な人間だ」と気づき、私達の主張を信じてくれるのではないかと。そう信じて交流を続けています。

私達2世は「後継者」と呼ばれ、最近は政府からも「後継者対策」を重要に考えて頂いていますが、私は「後継者」には2種類あると思っています。一つは先程お話しした大会の参加や署名活動、ビザなし交流への参加などの「返還運動」と呼ばれる活動を担う“返還運動後継者”です。こちらは元島民や2世3世に関わらず、全ての日本人が参加出来ます。特別な事をしなくても、領土問題を理解し、みんなに伝えて行く。どう有るべきかを考え、意思を示すことで世論を盛りあげる。それだけでも、とても大きな力になると思います。

そしてもう一つは、元島民である自分達の親や祖父母の思いを引き継ぐ“元島民後継者”です。島の様子や文化・生活など、今ではすっかり変わってしまった故郷の記憶を、身体が思うように動かせなくなった元島民と一緒に、自由訪問や墓参に参加して見聞きすることで、しっかりと未来に伝えていく。私も2世と言ってももう50の半ばです。島が還って来た時には、息子たち、孫たちに伝えなければいけないと思っていますが、このままでは私が生きている間に出来ないかもしれないと思い始めています。ですからこの数年は、二人の息子達も色々な機会に島へ一緒に行っています。

そしてこの“元島民後継者”には、もう一つ重要な役割があります。それは、墓を守ることです。根室の街ならばどこからでも見える、目の前の島に残してきた、しかし何時でも行くことの出来ないお墓を守って行かなけ

ればなりません。

場所によっては、当時の墓石などは何も残っていない所もあります。侵略してきたロシア人が、家を建てるために墓石を持って行き、土台などに使ったそうです。でも、両親や兄弟など先祖の魂は今でもそこに眠っています。

ですから、私達2世は“元島民後継者”として、今日のような語り部などの活動もしながら、先祖の墓を守っていかなければならないのです。毎年行われている墓参でも、墓地のあった場所は現在ロシア人も住んでいない場所が多く、上陸するためには船から小舟へ、さらに船外機だけの小さな船へ乗り移って島まで行き、砂浜へ下りなければならず、足腰の弱った元島民には大変な事です。そして墓参の際には、道の取締船や大学の実習船などを使うため、食事の片づけなどは自分達でしなければなりません。一緒に行ってお手伝いをする事も2世の役割です。私はこれから、出来る限り元島民をサポートしながら、さらに3世へと繋げていきながら活動して行こうと思っています。

そして、もちろん2世として返還運動の先頭にも立たなければならないと思っていますが、領土問題は元島民だけの問題では無く、日本の国の問題だと思います。北方領土に限らず、国土を守ることは国の基本です。今のようロシアのやりたいままにしていたら、いつか北海道も侵略されるかもしれないとすら思います。政権が安定しない中で、北方領土の返還を少しでも近づけるためには、国民みんなが毅然として更に国民世論を盛り上げ、ロシアにも届くようにしなければならないと思っています。

ですから、今日お出での皆さんにも、どうか返還運動へのご協力をお願い致します。



北方領土の早期返還を求めて

水晶島元島民 吉田 義久 さん

皆さんこんにちは、私はただいまご紹介いただきました吉田でございます。今日は、函館市女性会議「元島民の北方領土を語る会」にお招きいただき「元島民の訴え」を發表できます事を心より感謝申し上げます。

講話に入るのに先立ち申し上げます事は、私がこの様に皆さんの前で話をする事は不慣れですので、大変お聞き苦しい事や聞きづらい部分もあるかと思しますので、その点は何卒お許し下さいますよう、先はお願い申し上げます。

さて私の故郷は今、北方領土といわれている根室半島ノサップ岬より東に伸びる日本固有の領土である歯舞群島水晶島です。昭和12年8月に生れ8才まで、すなわち昭和20年8月の終戦まで生活していました。私の祖父母、父母が心血を注ぎ、苦労に苦労を重ねて開拓した島々なのであります。それだけに私の故郷としての想いがひとしおなのです。

北方領土の歴史につきましては、函館市の皆さんの方が、私より深く理解されておられる事と思いますが、函館市は古く江戸時代より北前船の寄港地として、また北方の島々の交流の拠点港として発展し、さらに戦後ソ連に強制抑留された島民の引揚げ帰還地として忘れられない地であります。

私が育った水晶島は、島全体がテーブルのように平坦な島で、一面草に覆われた島ですが四季を通して豊かな自然と豊富な水産資源に恵まれ平和な島でした。私の家族は、毎年この島を本拠地に昆布採集漁業と沿岸漁業を営み、生活の基盤を築いてきたのであります。

開拓当時の家は、丸太小屋で桎茸の屋根に

石をのせ、外の囲には干草を板で挟み土間には干草を敷き、戸の代わりにムシロを吊し雨露をしのいだ生活で、電気もなくラジオもない生活でしたが、大正、昭和に入り何とか生活も安定し、住宅や作業場、漁船も新しく作り替え、さてこれから事業が軌道に乗ろうとした矢先に第二次大戦が始まり、予想もしなかったソ連軍の参戦により終戦となり、日本は敗戦国となりました。

そして昭和20年8月15日終戦、戦後の8月28日より9月5日のわずか10日足らずのうちに、日本固有の領土である北方の島々がソ連軍の不法占拠により奪われて、私達元島民は島を追われたのであります。

全財産を島に残し追われた島民は、戦後の住宅難、食糧難、就職難の三重苦に悩まされ筆舌に尽くぬ苦労がありました。今思い起すと、この北方の島々では体さえ丈夫であれば一年中海岸に流れ着く昆布を拾ったり、岩のりを採ったりしていても生活ができました。また、北方の島々は冬の厳しい時期もありますが、春6月ともなれば高台の草原では北方特有の美しい花々が咲き乱れます。この頃になりますと浜は昆布漁の最盛期となり、大人も子供も一緒になって昆布干に加わり砂浜は大変にぎわいました。

このように記憶をたぐってお話し致しますと、懐かしい故郷がありありと思い浮かびます。

戦後66年経過した現在、まだ北方領土は返還されていません。我々元島民は、故郷北方の島々を偲び、引揚げ以来領土の返還を叫び続

けて来ました。その間にも、元島民の半数以上の人達が故郷へ帰るのを夢に見て、この世を去って行かれました。私達元島民は、先人が精魂込めて開拓した日本固有のこの北方領土を、一日も早く返還され先人の流した血と汗を無にならぬよう頑張っていく覚悟であります。

この北方領土返還運動は、元島民だけの問題ではなく日本国民全体の問題で、日本の主権に関わる大きな問題なのです。

本日お集まりの皆様はじめ、日本全国の皆さんにこの実情を訴え続けます。そして、一日も早く日本固有の北方領土が返還されるようお願い私の講話を終わります。ご静聴ありがとうございました。

【京都府会場】

- 開催日時 平成23年7月26日(火) 13時30分～15時30分
- 開催場所 京都府男女平等参画センター
- 開催団体 京都府連合婦人会
- 参加者 80名

元島民二世の訴え



北方領土の早期返還を求めて

志発島元島民二世 宮 脇 田鶴子 さん

こんにちは。宮脇田鶴子と申します。北海道は大まかに4分割され、道東、道北、道央、道南と言われており、その中の道東は網走管内、根室管内、釧路管内、帯広管内が入りまして、根室管内のほぼ中央に位置します中標津というところに住んでいます。世界遺産の知床国立公園、ラムサール条約の釧路湿原、霧の摩周湖、マリモの阿寒湖には1時間から2時間ぐらいで行くことができます。東京便も1便ですが飛んでますし、千歳からは3便飛んでおりますので、どうぞいらして下さい。

私の家族は5人家族ということになっていますが、姉の一人が志発島で生まれてすぐに死んでおりますし、兄が15歳で亡くなっており、父、母、姉、私、妹の5人家族で暮らして参りました。今では父も母も亡くなり、3人姉妹だけになっております。

父母共に教員でしたので、職場結婚となりますが恋愛ではなく、紹介による結婚でした。昭和13年に結婚いたしまして、17年に志発島に行き終戦まで住んでましたので、兄・姉までが元島民、私と妹が後継者となっています。

母は結婚して志発島に来たので、子供の時から住んでいた方々とは違う思いかと思いますが、志発島で生まれて直ぐの娘を亡くし、

墓まで建ててますのでそれなりの想いはあったのではないかと思います。父は、昭和4年に教員になり昭和6年に国後島に行きました。昭和10年までの4年間、泊の国後尋常高等小学校に勤務し、昭和12年から13年までの1年間、択捉島紗那の紗那尋常高等小学校に勤務しました。そして、昭和17年から20年の終戦まで志発島の西前にあります志発島西前国民学校に勤務してました。

教員になってからの島との関わりなので、母同様子供の時から住んでいた元島民とは違う思いであろうかと思いますが、別の角度で想い入れが強かったようです。父は、昭和51年に亡くなっておりますが、私が若かったことや後継者としての自覚がなかった事もあり、島での詳しい話は聞いてませんでしたので、今になっては色々聞いておけば良かったと思ってます。

ただ、昭和46年から48年にかけてだと思いますが、北方四島に勤務していた教員達が千島諸島での生活や教育状況を書き留めておこうと「千島教育回想録」を作成すべく、その原稿書きをしている時だったと思うのですが、父は「島での生活は良かった。暖かくて、川で泳いだり、スイカを食べたり、子供達の

ために道路を作ってくれと言ったら作ってくれたり、とても良い所だった。島が還ってきたら、また絶対行くんだ、行って暮らすのだ」と言っていました。このぐらいしか聞いた記憶がなく、後継者としてこの程度しか聞いてないというのは心許ないのですが、その言葉が今私が活動していることに繋がっています。

父の島への想いを、「千島回想録」に依るところではありますが、少しお話をさせていただきます。

国後島の資源は蟹、サケ、マス、ホッキ、鰯、昆布と豊富で、お金を出して買うことがなく、皆貰って食べていたそうです。また、教育についても、器械や施設が充実しており、図書においても他の学校にはない貴重な蔵書があるなど父兄の理解があり、援助協力が惜しみなくやればやるだけの成果が上り、充実した日々を送ったようで、そうした日々が忘れがたかったのだと思います。

そして、2年後に択捉島に行っています。択捉島は国後島より北にあり、海流の関係だとは思いますが国後島より暖かく、スイカが生り夏には川が温水プールになったそうです。サケ、マスはもとより、鯨も捕れたため捕鯨場もあり、国後島以上に豊かな島だったようですが、学校火災という不祥事が原因で1年で転勤になってしまいます。戦争が激しくなり、これで良いのかと満州派遣教員を希望しますが、志発島行きを命じられ赴任します。

志発の島民は、ほとんどが昆布採取業者でしたが、その他にホタテ採取業者がおり、日魯かに缶詰工場や加里塩工場もあり、国後島に負けない資源がありました。また保護者の理解と協力もあり、教育の成果が上がり父にとっては桃源郷だったと書いてあります。子供達のために、冬の寄宿舍を作りたいと言ったら作ってくれ、その頃は島の周囲に道路があるだけで、遠くの子供たちは嵐や高波になると学校に来られなくなるから内陸に道路を作りたいと言ったら、父兄の力で1日で作ってくれたこと等。教育に関する事を

したいと言ったら協力してくれる、こんな教育者冥利に尽きることはないと思います。

終戦になって、ロシア兵が上陸して来て日本兵が国後島に引き上げた時、後々島民も危害を加えられるかもしれないから、一時根室に避難しようということになり、何隻かに分けて避難したそうです。その中に、母と兄、姉を頼み、父は学校を守るため残ったそうです。子供たちはおりませんので、ただ番をしている状態だったようです。

今は教育局と言っていますが、当時は学史と言っていたようで、これからどうしたら良いかと再三指示を仰いでいたようですが返事がなく、ちょうど根室に行く船があり直ぐ帰るつもりで、残っている人達に何も言わずに根室に来て教育局に行ったところ「もう帰らなくても良い」と言われ、そのまま根室に留まってしまったそうです。

その頃、一時避難していた人達は持ってきた食料が底を付きだし、「これからどうしようか？島に帰ったら食べ物には困らないし…」と島に帰りだしたそうです。子供たちも島に帰ってくる中で、父に戻ってくれという話があったそうですが、戦後の混乱した教育現場の中で、戻らなくても良いと言われた事もあったと思いますが、父は戻らなかったのです。その時はそれで良かったのだと書いてありますが、そのことが余計に「島が還ってきたら、もう一度島に行って教育をするのだ」と言った言葉になったのではないかなと推察します。

昭和51年に父は亡くなりますが、52年に千島連盟の中標津支部が設立されます。その設立総会の案内文書が来た時、行くのは当然母が行くべきなのですが、母は行かないのです。都合で行けなかったのかもしれませんが。そして何故か私が行くのです。

「島が還ったら帰る」この言葉を聴いてなければ、行かなかったと思うのですが。父の代わりに行かなければならないと思ったのです。それで「良く来たね」という事だったの

か「ビザなしに行かないかい」「研修会に行かないかい」と言われ、参加しているうちに今になっています。

平成元年に、中標津支部青年部は出来ているのですが、新たに後継者として青年部の活動を始めたのは平成16年からになります。管内には1市4町ありますが、それぞれ各支部があり青年部があります。元島民が段々少なくなっていく中、「我々が後継者として何かして行かなければならないのではないか」と管内青年部連絡協議会を作り、事業や研修会を行い、元島民の想いを継承して行こうとしています。中間地点まで行き、北方領土をより身近に感じて領土問題を青少年に考えてもらいたいと、洋上セミナーをやっていますし、道内を回りながら署名活動をし各市町を表敬訪問して歩くキャラバン隊活動も行っております。

平成4年からビザなし交流が行われていますが、その最初の年に色丹島に行ってきました。志発島にはロシア人が住んでいませんので、ビザなし交流で行くことはできません。行くには自由訪問か墓参しかありません。

父母の住んだ島、姉が死んだ島、墓は建てたといっていました、あるかどうかわかりません。母が活着しているうちに一緒に行けば良かったのですが、亡くなってから4度ほど行っています。色々と活動していますが、署名活動に参加するようになってから冷たい反応に会いました。

地元では、夏と冬に行っているお祭りの中で、署名コーナーを設けて署名してもらっています。元島民の方々とやってましたが、高齢になってきたことで後継者も手伝いで参加するようになりました。初めて参加した頃、3分の1ぐらいの人達にそっぽを向けられました。「あんた達のためになんで署名しなければならないの」という感じでした。それまで、元島民の人達が署名活動をしているのです。「これって何」という感じでした。そのうち研修会等で歴史的な事とかを勉強してい

くうちに、後継者だから当然と思ってやってきたことですが、「これって元島民と後継者だけの一部の人達の問題なのだろうか？領土の問題なのだから国の問題なのではないだろうか？国民の問題として皆でやらなければならないことではないだろうか？」それにはもっと北方四島の事について皆様に知ってもらわなければなりません。

今、領土交渉は以前より後退している感がありますが、それでも風化させるわけにはいきません。中心的に動いて行けるのは、我々元島民と後継者になるのでしょうか。

島に還りたいと言っていた元島民の想いを、後継者として語り継いでいかなければと活動して行きます。

最後にどうぞ皆様、日本の領土問題として考えてください。そして領土返還の皆様の声を大きくしていただけると嬉しいです。ご静聴ありがとうございました。

齒 舞 郡 島

水晶島(茂尻消)
台場岬



多楽島



多楽石



志発島(相泊)



戦前の志発島
青年稲荷神社大祭での余興



北方領土の早期返還を求めて

志発島元島民 児玉泰子さん

私は1944年の秋、歯舞群島の志発島で生まれました。故郷の志発島は、納沙布岬から約23キロ先にあります。島は平坦で一面の草原です。居住者は主に東側と西側に別れて生活しておりました。私の生家は、東側で昆布漁を営んでおりました。

春から秋までは昆布漁の最盛期で、この期間は早朝から日が沈むまで、休む暇も惜しみます。冬季は、漁網の整備や翌年の漁具の準備をします。主な生活物資は、根室から船で運んでおりました。島は、豊かな海の恵みを受け島民全体が一つの家族のように助け合い、平和でのどかな日々を送っておりました。

しかし1945年9月、島はソ連軍に占領されソ連軍の管理下におかれた島民の生活は一変し、根室との連絡も遮断されました。ソ連軍の監視下での生活が始まったのです。1947年11月、強制送還の船で故郷の島を離れる事になりました。当時私は3歳、従って島の記憶は全くありませんが、家族や島民の方々から島の話しを沢山聞いて育ちました。

私は「自分は生きているうちに必ず故郷に帰る。そして家族全員で再び暮す。」その一念で北方領土の返還要求運動に43年間携わって参りました。

本日は「必ず島に帰るんだ。島は良かった。」と望郷の念を抱き亡くなった家族や同胞の思い、そして自分が体験したこと等を交え①北方領土の概要と自然②開拓と戦前の様子③占領から強制送還④元島民の故郷への思いなどをお話いたします。

戦前、北方四島には17,291人が定住してお

りましたが、春から秋の漁期には大勢の出稼ぎ労働者が入り、人口は膨れ上がり漁業基地として大きな生産を挙げておりました。北方領土の面積・歴史・条約などは、先ほど事務局の方が説明されましたが、面積に関して分かりやすくお話しいたします。

国後島は、沖縄本島より少し大きいです。択捉島はその2倍あります。北方四島は歯舞・色丹・国後・択捉と呼ばれますが、歯舞と言う名の島はありません。正式には歯舞群島です。命名の由来は、根室から納沙布岬に行く途中16キロの所に歯舞村の本村がありました。歯舞群島は歯舞村の行政区域だったので。現在、歯舞群島と本村が寸断されているのです。

周辺の海は水産物の宝庫です。戦前の主な生産物は、歯舞群島は昆布、色丹は鯨・鱈など、国後は蟹缶、択捉は鮭、鱈の塩蔵でした。その他、何れの島でも干鰯・ホタテの貝柱・海苔・小型魚種等も生産しておりました。

それでは個々の島々に関してもう少しお話いたします。歯舞群島は、どの島も起伏がなく平坦で一面草原に覆われています。周辺の海は、岩礁が多いので良質の昆布が育ちます。従って、昆布を餌にするウニ・蟹・貝類などの甲殻類が豊富で、これら甲殻類を餌にするアザラシやラッコなどの海獣類も多く生息しています。

志発島は昆布漁が主体で、生産された昆布は国内は元より上海などに輸出されておりました。西側では、帆立貝の缶詰も生産しておりました。また、島内の草原を利用し馬の飼育も行っており、特に軍馬の生産地でした。

水は豊かで飲料水には恵まれておりました。婦人会の皆さんは、歯舞産の昆布は馴染みの品と思います。

色丹島の産業は、捕鯨が主体で東洋一の捕鯨基地だったと聞いております。島はとっても綺麗です。緩やかな稜線と緑の濃淡が美しく自然の箱庭、独特の風景です。特に太平洋側の海岸線の松と岩礁のコントラストは見事です。この島にのみ自生する高山植物が多く、高山植物の宝庫です。

国後島は、タラバ蟹や帆立貝の宝庫で主な産業は蟹缶詰の生産でした。世界で始めてタラバ蟹の缶詰生産を行ったのが国後島だとも言われております。生産された蟹缶詰は、横浜から海外に輸出されておりました。東方には、北方四島で一番高い「爺爺岳」^{ちやちやたけ}が聳えます。オホーツク海岸には、海底火山で出来た見事な柱状節理「材木岩」があります。そのほか良質な温泉も湧き、自然溢れる島です。

択捉島は雄大です。島内は大小200本の川が流れています。秋になると河に大量の鮭・鱒が遡上してきます。島内の自然は正に絶景です。山、山また山、大小の無数の山が幾重にも連なり、雄大な景観は圧巻、他に類を見ないほどで自然の宝島、山と水の島です。山から流れる川と湧き水は大湿原を作ります。何処までも続く草原は広大な原生花園、次々に可憐な花を咲かせます。大小200本の川は、陸の栄養を蓄えミネラルをたっぷり含んで海に流れ、周辺の海域を豊かにします。海草が育ち、甲殻類の揺り籠ラッコなどの成育に最適です。延々と続く白い砂浜やリアス式海岸。島の東方にある「ラッキベツ滝」は落差141m、水量も多く圧巻です。もちろん温泉が湧き出ております。

北方四島の海域は、オキアミからシャチまでが生息する正に豊饒の海です。また絶滅危惧種の海鳥、エトピリカ・ケイマフリ・ウミガラスなどの海鳥が生息し、陸にもホテイアツモリソウ、その他の絶滅危惧種の高山植物が多く自生する自然の楽園です。ロシア政府

は、現在島々の開発に着手しました。昨今、この豊かな自然が壊されつつあります。そして、魚類の乱獲が続き、甲殻類が極端に減少しています。甲殻類が無くなるとラッコなどが生息できなくなり、自然環境が崩れつつあります。

北方領土の本格開拓は江戸時代です。私の先祖は、岩手県から船を調達し島に渡り昆布漁に携わりました。昆布を生産するには、干場^{かんば}を作らなければなりません。草原を掘り起こし、砂と石を入れ土をかけてしっかり固めます。その時、中心を少し高めに傾斜が付くようにします。これが完成したら碁盤の目の溝を掘ります。さらに石を敷き、その上に砂を敷きます。このように干場作りに手間を掛けるのは、水はけを良くするためです。昆布は雨水に触れると腐るので、雨水から昆布を守るためです。まさに、父祖が血と汗で築いた土地です。

島は水が豊富なので、大根やジャガイモ、人参など野菜も作れました。魚も豊富に採れ、夏場に冬の保存用食料を確保しました。海の恵と大地の実りに恵まれ、島民全員が大きな家族のように助け合い生活しておりました。

島は、戦争の直接被害を受けずに生活しておりました。戦争との関わりは、軍人さんの駐屯と軍馬の生産でした。昆布を焼いて「塩化カリ」を作り軍に納めていました。これは火薬の原料になったそうです。村の青年の多くが出征し、私の叔父も出兵しておりました。父は、昆布漁の他に馬の飼育に長けていたので、軍から軍馬の種馬を預かり軍馬の生産にも携わっていました。

戦争を身近に感じたのは1945年7月、根室がアメリカの砲射撃を受け、7割が焼け野原になりました。根室を焼けつくす火は、空を真っ赤に染め志発島からも見えたそうです。真っ赤に染まる空を見て、戦争を身近に感じたそうです。

1945年8月15日、ラジオから流れる天皇陛下の声を聞いたそうです。私の家族は、これ

からどうなるのかと不安を抱きました。アメリカが来るなどと噂が出ましたが、家族は今までどおりの生活を続けたそうです。しかし、翌月に島はソ連軍に占領されました。終戦の知らせを受け、アメリカ兵が来るのではと思っていました。しかし9月2日、私の島にソ連兵が上陸して来ました。駐屯していた日本の兵隊さんは、シベリアに送られました。日本軍の施設はソ連軍が利用しました。

北方領土占領は、初めに8月28日早朝、択捉島の留別村にソ連軍が海から上陸してきました。この日は、一寸先も見えないような海霧に包まれ、島民はソ連軍の上陸に気づきませんでした。日が登り、霧が薄くなると島民の目の前に銃を構えたソ連兵が立っていたのです。役場、学校、警察、郵便局など主要な施設は、ソ連兵に押さえられました。そして、国後、色丹、歯舞群島の島々が次々と占領され、9月5日までに全ての島が占領されました。島民は本土との連絡も途絶え、ソ連の監視下で不安な生活が始まりました。

占領の経過を少しお話いたします。8月18日、千島列島の北端の島、シュムシュ島にソ連軍が上陸して来ました。ここでは戦いをしております。その後、ソ連軍は千島列島18島を南下し、ウルップ島まで占領しました。この時、ここから先はアメリカの占領になると言って引き返しております。この話は、ソ連軍に同行した人が史記に書いております。しかし、北方四島がまだ占領されていないので、別の隊が樺太から択捉島に向かいました。

8月27日、択捉島の沖合いに大きな船が現れました。勇敢にも島民の代表が、船を出して沖の船を見に行きました。船に掲げていたのはソ連の旗でした。翌日、留別にソ連軍が上陸して来ました。択捉島の電話の中継地点が留別でした。留別が占領され、島内の連絡は元より北海道への連絡も途絶えてしまいました。「島が占領されたことを本土に連絡しなければ。」留別郵便局の局長さんは、ソ連軍の目を掻い潜り、ソ連兵に追われながらも

隣村に向かいました。隣村の紗那には無線施設がありました。ここから定期的に無線連絡を行っていたからです。こうして島が占領されたことが根室に伝えられました。私たち家族は、ソ連軍が上陸してきたので母は乳飲み子の私を抱え、屋根裏に隠れたそうです。銃を抱え土足で家に上がって来ました。どうなるのだろう、恐怖で震えました。

日々が経過する中、何日か置きに見回りに来るソ連兵のパターンが分かりました。そして、ソ連軍が島を巡回するには馬が必要です。良い馬が居る我が家に、必ず立ち寄り馬を調達しました。母は、毎日屋根裏に隠れているわけには行かないので、ある日居間に降りておりました。その時、折り悪くソ連の将校が家に上がってきました。

母は隠れていたのがバレるので、凍りついたそうです。その時、将校が手を差し出したそうです。身振り手振りで、私を抱かして欲しいと要求しているのではと察した母は、恐る恐る私を将校に渡したそうです。将校は上手に私をあやし、自分にも同じ位の子供がいると身振りで伝えたそうです。母は、親として子供を思う心はロシア人も同じだと思うと恐怖心は消えたそうです。

島を離れるまでの二年間、将校は私のことを自分の子供のように可愛がってくれたそうです。しかし、人々の生活は常にソ連軍の監視下のもと、根室との連絡は途絶え自由を奪われ、漁師の父も土木作業に借り出されるなど一変しました。怖くて脱島する人も出て来ました。

こうした中、一般のロシア人が島に入ってきました。ロシア人は着の身着のまま、麻袋にフライパン一つ程度の荷物でした。住む家もなく、ロシア人は脱島した日本人の家に住みました。学校は二つに分けて使用しました。こうして文化や風習、更にモラルも異なりトラブルも発生しましたが、ロシア人と日本人が助け合いながらの共同生活が始まりました。島民は、本土と連絡も途絶えながらも、

日本人だから日本の領土だから島に留まったのです。

言葉も風習も異なり、銃を抱え土足で家に入るソ連兵に対する恐怖は募り、特に年頃の娘さんがいる家族は不安だらけでした。年頃の女性は髪を切り、男性用の服を身につけ、胸にさらしを巻き、あぐらをかいて座るようにしました。家族は娘の身を案じ、脱島を決意しました。

国後島の18歳の娘さんがいた家族の話です。年頃の娘が、暴行されるのではと親は案じたそうです。ある日、親から「島を出る事にした。何時でも出れるように準備して置くように」と言われたそうです。その夜は、島を離れると思うと悲しくて恐ろしくて涙が流れたそうです。しかも脱出する時は、ソ連兵の監視が怠る海が荒れている日か濃霧の日です。ある嵐の夜、寝付いたらお父さんに島を出ると起こされたそうです。その時に、お母さんから「万が一の時にはこれを食べましょう」と毒入りの団子が入った小さな袋を渡されました。袋は着物の内襟に縫い付けました。恐ろしくて叫びたくなり、足が震えました。船は島を離れ、根室に向かいましたが嵐で航行不能になり、国後の浜辺で休む事にしました。暗闇の中、大波に襲われながらもどうにか浜辺に上陸し、時化が収まるのを待ちました。

夜が明け、辺りが見えてきました。目に飛び込んできたのは、浜辺に打ち上げられている死体でした。先に脱出した知人が嵐で遭難したのです。自分もこうなるのではと思うと恐ろしくてたまらなかったそうです。やっと嵐が収まり、再び船に乗りました。ずっと船倉に身を屈めていました。何時間か経った時、お父さんの「もう出てて良いぞ」と声が聞こえてきました。甲板に出ると、根室の街並みが見えました。お母さんと抱き合い、互いに毒入りの饅頭の袋を襟から取り合いました。彼女はそれから故郷の国後島が見える根室で生活しています。故郷には帰りたいが、あの

脱出した時の恐怖が蘇り、海峡を渡ることは出来ないと話しています。

1947年7月から送還が始まりました。僅かな荷物を持ち、島からソ連の貨物船に乗せられ、樺太の真岡^{まおか}に収容されました。そして日本の船で函館に送られた。送還は1947年5回。1948年2回です。計7回です。最後の送還は1948年10月でした。島民は島に留まりたかったのですが、島に留まるとソ連の国籍に入れられるのです。日本人として生きて行くためには、止むを得ず島を離れるしか方法はなかったのです。しかも一時的な引揚げと思っていたいました。

私の家族は1947年11月、送還されることになりました。島を離れる前に家財道具を整理しました。「必ず島に帰れる」から、家財道具の一部は軒下に穴を掘り埋めました。持ち出せる重さが決められました。ソ連の将校が来て「今、日本は食料が不足している。食糧と衣類を持った方が良い」とアドバイスしてくれたそうです。

私は3歳になっていました。妹は生後3ヶ月でした。11人の家族は、指定された浜辺に向かいしました。島民が集まってました。炎天下の中で、長時間立たされ一人一人確認され、やっと小舟に乗り沖合いに停泊しているソ連の貨物船に向かいしました。貨物船は高いので乗り移ることが出来ません。私たちは、荷物の上げ下ろしに使用する大きな網袋に詰め込まれました。荷物用の網袋に入れられた私たちは、洋上で10mほどウインチで吊り上げられました。袋が大揺れします。下は海。恐怖で泣き出す者、念仏を唱える者、生きた心地がせず声も出せない状態でした。

貨物船は、他の島を回り日本人を収容しました。初冬の北の海は荒れ狂い、船の波間に漂い、船酔いの嘔吐などで悪臭が漂い、船倉も甲板も人で大混乱でした。トイレの数も不足、船倉に入れられた年配者や幼児は急な梯子を昇れません。やむを得ず空いた容器に用を足します。甲板にいる人は、甲板の端で用

を足しました。時化の海水が甲板を襲い、この嘔吐物や汚物を含んだ海水が船倉に落ちてきます。頭から汚物を含んだ海水をかぶるのです。体力のない老人や幼児が亡くなると、病気が発生するので海に捨てました。人間ではなく、荷物同様に扱われたのです。向かったのは樺太の真岡でした。

樺太の大地はもう凍り始め、収容所に向かいました。収容所は丘の上にありました。小雨が降り、寒さが襲ってきました。足場の悪い、急な坂道に足を取られながら歩かされました。父は、背負ったリュックサックの上に私を乗せ姉の手を取り、母は妹を背負い兄の手を取り、祖父母や叔父・叔母は荷物を抱え、黙々と歩いたそうです。収容所は女学校でした。建物の中に入れない人はテントでした。収容所の食事は乏しく、黒パンと塩スープのみ。体力の無い人は「飯が食べたい」と言いながら亡くなりました。亡くなった人は集められ、トラックに積まれ運ばれて行きました。

その後、日本の船が迎えに来ました。そして、辿り着いたのが北海道の函館でした。やっと着いた。皆、涙を流して抱き合いました。

私たち家族は根室に向かいました。根室では、11人の家族と一緒に住む家が無いので、親戚の家や母の実家に分かれて住むことになりました。以来、私たちは一度も家族全員で生活することができないまま今日に至りました。私にとって島は家族が全員で暮した唯一の場です。

先に話しましたが、私の曾祖父は江戸末期島に渡り、4代に渡り島で生活していました。曾祖父は祖母の父親でした。島生まれの祖母は、栃木から島に渡って来た祖父と結婚しました。

ある年、島は春になっても海が荒れ定期船が立ち寄れなく、備蓄していた米が底をつく状態になりました。島の有志が、根室まで米を買いに行くことにしたそうです。根室で米を買い島に帰りましたが、島民が見守る中、船は横波を受け沈みました。全員死亡、その

中に曾祖父がいたのです。祖母は、父親が乗っている船が沈むのを見ていたそうです。祖母は引揚げるまで、月命日には船が沈んだ近くの丘の上から海に向かい手を合わせ、冥福を祈っていたそうです。そういうわけで、一家の中で島への思いは祖母が一番強かったのです。

祖母は「あの島は俺の島だ。もう一度島に戻り、家族全員で暮らすんだ。」と言いつけておりました。島のことや、家族の生活を沢山話してくれました。私は島を見てそんなに帰りたいのか。どうしてそんなに^{こたわ}拘るのかと不思議でした。

強制送還されて20年後の冬、祖母は納沙布岬に近い川に身を沈めました。島に帰るのだと言いつけていた祖母が・・・何故。大切な島を追われ、その後息子を事故で失った祖母の心は、ボロボロだったのでしょう。私は、祖母があんなに帰りがった島に帰る努力をしようと心に誓いました。

現在、北方領土への訪問は元島民の墓参・元島民の自由訪問、それにビザなし交流です。四島交流では、歯舞群島を訪れることが出来ません。それは一般のロシア人が住んでいないからです。従って、墓参と自由訪問の枠で故郷を訪問します。墓参に参加できるのは、先祖が島に埋葬されていなければなりません。自由訪問は、島に居住していた方々の関係者が訪問できます。

平成元年、墓参団員として生まれ故郷に渡りました。島の浜辺で耳にしたのは、波の音と波が運ぶ小石の音でした。母がお嫁に来た時に、波の音が耳に付き眠れない日が続いたと言っておりましたので、この音だ・・・「故郷の音」です。小石を両手ですくいました。私の「故郷です」。祖母があんなに帰りがった島です。止め処も無く涙が流れました。出来ることなら「家族全員で来たかった」。

拾った石は今も身につけています。挫けそうになった時に、勇気を与えるお守りの石です。島を離れる時に、海水をすくい口に含み

ました。海水ですから塩辛いのは当たり前ですが、私たち島民の戦後の人生のように苦かったです。

9年前、やっと生活していた場所を訪れる事になりました。そこは、見渡す限り背丈まで伸びた草で覆われ、目印は何もありません。生い茂る草をかき分け、夢中で進みました。限られた時間の中で、何か探さなければと気は焦るばかりでした。やっと生れた家の跡に立つことが出来ました。一帯を隈なく探すと、生い茂る草の中から祖父が使っていた手水鉢を見つけました。「やっと来た。」形見の品に触るのも忘れ、ポーっと立ちつくしました。気を取り直して一帯をゆっくりと歩くと、足の感覚が変りました。硬いのです。ここだけ背の低い草が茂っています。先祖が丹精込めて作った昆布の干場でした。目頭が熱くなり故郷が涙で霞みました。

二度目の訪問は、妹を伴いました。この時には、二度目なので少し余裕もありました。父が使用していた馬櫓を見つけることができました。草原を馬櫓で駆ける父の勇姿が思い浮かべられました。

その時、団員の中に目が不自由な方と杖を付いた80歳を超えたご老人も参加しました。齒舞群島は、どの島も上陸するには洋上で二回船に乗り換えなければなりません。大変危険です。悪天候で波が高く、故郷の島を前に上陸は困難な状態でした。止む無く一日目は上陸予定地を変更しました。二人は、甲板でジッと島の方を見ていました。ご老人は「杖を付き、歩くのもままならない。皆に迷惑を掛けるが、死ぬ前にどうしても故郷の島に来たかった」と一言。明日、波が収まることを祈りました。

翌日、波のうねりは収まっていないが、予定通り上陸する事になりました。全員で、抱えるようにして洋上の乗り換えを補助しました。やっと無事上陸できました。目の不自由な方は、奥さんと孫が寄り添い、石原をゆっくりと進みました。背丈を越える草が生い茂

る急な傾斜地は若い団員が手を取り前に進みました。やっと見晴らしの良い草原に辿り着きました。大きく息を吸い故郷の香りを確認していました。「川はどっちに見える?」「斜め左の方だ。」団員が彼の手を取り方向を知らせました。「それなら、此处が我が家の跡地だ」彼はジッと佇んでおりました。目には見えないが、心の目は故郷を映し出していたのでしょうか。

杖を付いたご老人も、家の跡に行くことが出来ました。島を離れる時に、二人は何時までも甲板に立ち尽してました。ご老人の姿が、祖母と重なりました。草生す丘の上から海に向かい、祖母の思いも含めて手を合わせました。なんで60年以上もこんな辛く悲しい日々を送らねばならないのでしょうか。

今年6月、島の西側を訪問しました。63年前に、引揚げ船に乗せられた所です。家族11人が最後に目にした島ですが、今では家族の半分は亡くなりました。

上陸した浜辺を歩くと、砂の中にホタテ貝の殻が混ざっておりました。大きな貝殻の一部が、風雪と波に洗われ小さく砕け、キラキラと輝いてました。拾い握り締めました。砕けた貝殻は私たちの長い歳月を物語っているようでした。亡くなった多くの同胞を思い出し、涙が零れ落ちました。

帰りたいと言い続けながら、願い叶わずお亡くなりになる人が、これ以上増えないうちに解決して欲しいです。

北方領土を故郷にする私たち島民は、皆一緒に島に帰ろうと励ましあい生きてきました。返還要求運動の先頭に立って頑張ってきましたが、66年経っても未だに願いは叶えられません。無念です。

北方領土は私たち島民のみならず、大切な日本国民の領土です。皆さん一人一人の島です。自分の問題としてしっかりと受け止め、本日の話しを少しでも活かして、ご婦人らしい発想で返還要求運動に取り組んでいただきたくお願い申し上げます。

色 丹 島



戦前の
チボイ山



最近の
斜古丹山

【栃木県会場】

- 開催日時 平成23年度10月28日(金) 10時10分～12時00分
- 開催場所 栃木県婦人会館
- 開催団体 栃木県地域婦人連絡協議会
- 参加者 110名

元島民二世の訴え



北方領土の早期返還を求めて

志発島元島民二世 神 林 美 砂 さん

みなさんこんにちは。ただ今ご紹介頂きました神林美砂と申します。こうしてたくさんの方にお集まり頂きましたことにお礼申し上げますとともに、北方領土返還要求運動にご理解とご尽力頂いていることに敬意を表します。

本日、このような機会を頂きましたので、栃木県と北方領土について少しですが関連のあるお話を2つしたいと思います。

私がまず思い浮かんだのは、昨晚も食べたのですが宇都宮といえば「餃子」です。みなさんご存じのとおり、現在北方領土にはロシア人が暮らしていますが、彼らの国にも「ペリメニ」と呼ばれている水餃子があります。私たちと同じで、各家庭それぞれに特徴があって、皮も手作りで作っています。具にしっかりと塩コショウやニンニクなどで味をつけて、茹でたアツアツのところにバターを溶かしたり、サワークリームをのせて食べています。

ビザなし交流のホームビジットでご馳走になることもありますし、交流会のテーブルにあったりボルシチと並んで定番です。近年では、日本と同じで冷凍食品も売られています。返還運動の一環で「相手を知るには、まずは食から!」ということで、ロシア人講師によ

るペリメニ作りをしている団体もあります。

もう一つは「華厳の滝」です。調べたところ落差は120mということでしたが、国後島と択捉島にも多くの滝があります。中でもすごいのは、後でお話しされる三船さんの故郷、択捉島薬取村の北の端にある「ラッキベツの滝」はアイヌ語で「ぶら下がった川」という意味で、落差が144mあって海に流れ落ちている滝です。是非見てみたい滝です。実は華厳の滝も見たことないのですけれどね。

私は、根室で生まれ根室で育ちました。母は歯舞群島・志発島の出身です。子供の頃、納沙布岬から見えるあの島々には、大きくて怖いロシア人が住んでいると思っていました。根室では、小学校の高学年になると社会の時間に「北方領土」の授業があり、地理的なこと歴史、戦前の暮らしなどを学びました。返還運動に関わってからは約20年。その間、様々な機会を与えられました。本日は私が見聞きしてきたこととお話してまいります。

初めに北方四島の概要についてお話します。国後島は沖縄本島より少し大きく、択捉島はその約2倍、この二島で四島の93%の面積を占めています。この二島は山々が連なり、

多くの川が流れ雄大な大自然の島です。国後島の爺爺岳は、四島最高峰の美しい山です。島の北東、択捉島側にあります。私が小学6年生の時に大噴火し、根室にも真っ黒な火山灰を降らせて、傘をさして学校に行きました。択捉島の太平洋側には真珠湾攻撃に向かう連合艦隊が集結した^{ひとかつぶわん}単冠湾、そしてオホーツク海側には昭和20年8月28日、ソ連軍が四島で一番初めに上陸してきた留別があります。

色丹島は、なだらかな丘が続く緑の美しい島。アナマ湾は深く切れ込んだ良港で、昔も今も嵐の時の船の避難港です。歯舞群島は起伏が少なく、私たちは煎餅島なんて言っていますが、主な五島（水晶・秋勇留・勇留・志発・多楽）で周辺には海鳥や海獣類の多く生息する大小様々な岩礁があります。

戦前、四島には17,291人が住んでおりました。漁期には多くの出稼ぎの人もいたそうです。島民は海からの豊かな恩恵を受け暮らしていました。当時は冷凍技術がありませんから、獲れた魚介類・海藻類は塩蔵や乾燥、また缶詰に加工していました。皆さんおなじみの昆布はとても良質なものでした。今もですよ。

志発島では、昆布と並んで乾燥帆立貝柱もたくさん作っていました。学校帰りに、干してある貝柱をポケット一杯に詰めて、食べながら帰ったそうです。ここに志発島から私が持ち帰った貝殻があります。すごく膨らんだ貝殻です。そうです、貝柱がとても大きかったのです。

昭和の初め、択捉島・紗那では豊漁が続き景気が良く、豊の下にお札が敷いてあったという話も聞きましたし、三越の通販で買い物をしていたそうです。噴水のある家もあり、テニスコートもありました。択捉島に現在も残っている2つの日本時代の建物「水産会事務所」と「郵便局」もこの豊漁の時期に寄付によって建てられたものです。また、カニ缶の酸化防止の白い紙は、国後島の缶詰工場が始まりと言われています。

歯舞群島と国後島は主に根室の経済圏で、物資は根室から入っていたそうです。択捉島には函館からの船が入っていました。先程お話した単冠湾は、冬でも結氷しなかったので1年中物資や郵便が途絶えなかったそうです。

豊かなのは水産資源だけではありません。先ほどの滝の話もそうですが、雄大な自然です。解りやすくいうと、知床が何十もある感じ。山・川・森・高山植物・滝・湖・湿原・温泉、そこにはクマ・海鳥・シャチ・鯨・ラッコなどの生き物が生息しています。現在もロシア人居住地区を除き、ほとんどが手付かずの大自然です。近年、ロシアの国家予算が付き、開発や整備が急ピッチで進んでいます。また、資源の乱獲でこれらは壊されつつあります。こういった環境面からも、返還を急がなければならないのです。

私は、ビザなし交流の始まった年に島に行く機会を得ました。先ほどお話したような、子供の頃のイメージを持ったまま参加しました。とにかく行って見てみよう、と思ったのです。

初めて見た国後島・古釜布。霧の中、湾にはたくさんの沈船が放置され、見える建物は潮風にさらされた古い建物ばかり。廃墟のように見えるこの島を、なぜロシアは返さないのか。これが「知床旅情」で歌われている「遙か国後」なのか…。錆色の景色を見て一番初めに感じたことです。択捉も色丹も同じように錆色でした。

しかし天気が良くなると、青い空、溢れる緑・素晴らしい自然が目飛び込んできました。ロシア人も明るく、子供のころから持っていたイメージを捨てるのには、それほど時間は掛かりませんでした。この初めての訪問で、私は択捉島出身のおじいさんに出会いました。私たちは運悪く嵐に遭い、択捉島のオホーツク海側で丸一日停泊することになりました。そこは、おじいさんの故郷の村の沖合でした。嵐に遭わなければ目にするのではなく、夜中に航行するはずの場所でした。大

きく揺れる船の中で、鳥のことをたくさん話してくれました。そしてずっと島を、故郷を見ていました。色々思い出していたのでしょう。

天候が回復し、夜中に船は碇をあげました。その際、元漁師だったおじいさんが「あの山の雲が取れば風向きが変わる。そうしたらGOだ。」と船長さんにアドバイスしたそうです。おじいさんは真っ暗なデッキに出て、島に眠る家族に「般若心経」を唱えたと翌朝聞きました。

私はおじいさんに言われました。「ねねこ～（おねえちゃん）、オレはもう（島に）来られない。後は頼むぞ。」「そんなことないよ、また来られるから。」と返しましたが、胸がいっぱいになりました。鮭は生まれた川に戻ってきます。「鮭になってでも帰りたい。」と言っていましたが、叶うことなく亡くなられました。

私は、2007年に家族で初めて志発島の元居住地に行きました。同じ地区に住んでいた人たちが「ここ、あんたのトコ。」と教えてくれたり、初対面の人から亡くなった叔父や叔母の話を知りました。

先程ホタテの貝殻をお見せしましたが、他にもあります。生活していた証しのお茶碗のカケラ、石炭。海底に鉱脈があって、波で削られて打ち上げられているらしいのですが、戦前も集めて燃料にしていたそうです。石炭拾いは子供の仕事で、その頃に帰ったように皆さん集めていました。それと「多楽石」と元島民が呼ぶ石、メノウの一種だと思っひときわていますが……。これは本当に、波打ち際で一際輝いて見えて、みんなで水際をジャブジャブと下ばかり見て必死に探しました。

ソ連軍に占領された1945年9月には、母の家族は祖母の姉のところへ皆行っていて島には誰もいませんでした。でも、祖父の大きい船が沖留めされていて「ソ連兵が島の反対側に行っている間に、その船で女・子供だけでも根室に逃がそう。」ということになり、地

区の人たちが乗れないほど集まったので更に小船を引き、船は根室に向かったそうです。占領後、初めての多勢の引き揚げということで、島の様子を知りたい役所や多くのマスコミが船を迎えたそうです。

その船に乗っていた、一家の末の妹さんが私に言いました。「私は、島を出てから生まれたのだけれども、あなたのおじいさんの船に家族が乗らなかったら、私は今ここにいなかったかもしれないのよ。」と。

今年6月、再び志発島に行ってきました。元居住地の再確認と、出来るだけ一世の方のお話を聞こうと思っていました。3月の地震の津波で、砂浜には千切られた海藻が高く積もり、浜辺に壁が出来たようになって随分様子が変わっていました。前回確認したはずの家の場所も、この辺りというのは判ったのですが、頼りだった近所の姉妹（お二人とも80歳を超えています）が体調を崩し参加出来なくなったこともあり、ちゃんとした再確認が出来ずに戻ってきました。

こんな状況だったのは私だけではなかったので、一緒に参加した同じ世代の人とお互いの家の場所を皆で確認しましたが、先程北方同盟からの説明でもありましたが元島民の平均年齢は77歳。高齢化が進み、記憶の引き継ぎが難しくなっていることを実感しました。

志発島には何もありません。ロシアの国境警備隊が駐屯し、エビの漁期にだけ来るロシア人がいるだけです。ビザなし交流に参加した時も同様ですが、元島民の方々はただ、ただ島を見ています。私たちには、見えない昔の景色や家族を見ているのです。その想いが伝わるほど切なくなります。私は、できる限り現地で元島民のお話を聞くようにしています。島への想いをより強く感じるからです。

皆さんもそうだと思うのですが、故郷というのは年を取れば取るほど懐かしく、恋しくなるもの、ですよ。年を取って、自分の生きてきた月日を振り返ったり、懐かしんだり

すると、必ず故郷を思い出します。自分たちの意志ではなく、出てきたままで自由に行けないとなれば尚更です。

島からの引き揚げ方は様々です。歯舞群島の島々や、国後島の北海道に近い地域などからは、嵐の夜やソ連軍の見張りが手薄になった時などに、根室目指して小舟で逃げてきた人も少なくありません。命を失った人もいます。若い女性は、ソ連兵に見つかったら乱暴されるかもしれない、と服の襟に毒を練り込んだ団子を忍ばせていたそうです。また、送りこまれてきたソ連人と共に暮らし、寒い時期に劣悪の環境の引揚げ船で樺太経由で函館に送られた人。なかには村を出て、函館に着くまで3ヶ月掛かった人。家の子供が皆小柄なのは、引揚げ時とその後の栄養が足りなかったという人。病気になったり、定住地がなかなか決まらず引揚げ後も大変苦労されたそうです。

「すぐに帰れると思っていた。残るとソ連人にならなくてはいけなかった。」と言います。

3月11日の東日本大震災の後、岩手県に住む国後島出身の方にお見舞いのハガキを書きました。その方は、内陸にお住まいなので大きな被害には遭われていませんでしたが、後でお手紙をいただきましたので一節をご紹介します。

「特に、福島原発周辺の被災者の避難所生活を思う時、住み慣れた国後島を追われ、樺太の真岡の収容所で家族8人と共に過ごした半月ほどの日々を思い出します。」とお手紙です。自らの意志ではなく、故郷を離れ、先が判らないということが引揚げの時の自分達とダブったのでしょう。同じようなことを他の元島民の方もおっしゃっていました。

島を返せと言うが、日本人は今更この便利とは言えない島に住めるのか？と聞くロシア人もいます。そういう理屈ではないのです。故郷だから帰りたい。ただそれだけ、当たり前のことなのです。

私たち2世や3世は「後継者」と呼ばれて

います。文字では「後を継ぐ者」と書きますが、元島民の後継者として何を継ぐのか？と考えました。66年進展のないことの後を継ぐ。とても重いものです。

北方領土は4つの島で「北方領土」であるということ、今日お話をさせていただいた「島への想い」をしっかりと継ぎ返還運動をしていくこと、それが後継者の役目です。先程の三船さんのお話しや、それぞれの元島民が抱えている「島への想い」を聞き伝え感じ、一日も早い解決を目指し力にして行きたいと考えています。

本日は本当にありがとうございました。



北方領土の早期返還を求めて

択捉島元島民 三 船 志代子 さん

皆様こんにちは、私は三船志代子と申します。私は北方四島で一番北にあり、一番大きい島、択捉島の薬取村しべとろで生まれました。薬取村の薬取とは、アイヌ語で大きい川という意味があるそうです。本日は、薬取村とはどんな村だったのか、また、人々はどんな暮らしをしていたのか。戦後、ロシア人がやってきた時の事。引揚げの様子などをお話します。

始めに、私の生まれた薬取村はどんなところだったのかお話します。今、墓参または自由訪問などで島に行く事が出来ます。薬取に行くには、根室の港から船で一昼夜かかります。しかし、村はすっかり自然に還っており無人状態です。代わりにヒグマの住処になっております。ロシアのハンターに護られ上陸しますが、学校の門、お寺の境内にある松の木、神社や泰安殿の土台などが残っております。また、小高い丘にあったお墓から捨てられた墓石、この墓石が一箇所に集められているのを見ると、昔人が住んでいたことが解ります。

ここに「ばあちゃんのしべとろ」という絵本がございます。皆様ご存知ですか？この絵本は、平成13年度北海道根室支庁が、「子供たちに、もっと四島（しま）のことを知ってもらいたい」ということから、一般公募し、最優秀賞に選ばれたものです。作者、文は三船志代子私です。素敵な絵を画いてくれたのは、娘の同級生の林真紀子さんです。ここで読んでみますので、薬取ってどんなところか想像しながら聴いてください。

「ばあちゃんのしべとろ」朗読する

この絵本は、私の幼かった頃の記憶、だん

だん薄れていく記憶を思い出しながら綴ったものです。この絵本が、最優秀賞に選ばれてから当時の様子に間違いは無いかと心配になりましたが、親は既にこの世には無く、先輩に当たる方たちに確認したところ薬取村のことがよく描けていると認めていただきました。それでは、薬取村では、人々がどんな暮らしをしていたのか、お話いたします。

まず魚は沢山獲れたようです。世界の三大漁場の一つと言われておりましたから。択捉島には、昔々1800年代と言いますから約200年前、幕府の命により高田屋嘉兵衛・近藤重蔵・最上徳内らによって漁場が17箇所開設されております。その時、信心深い高田屋嘉兵衛は各漁場に地蔵尊を一体ずつ安置し、豊漁を祈願したそうです。薬取もその内の一つだそうです。

村の人々の多くはここで働きました。また、魚が獲れる季節になると、多くの出稼ぎの人々もここで働きました。出稼ぎの多くは、この度の3・11東日本大震災のあった東北地方の出身者が多かったようです。冬が来て、漁が終われば切り上げ。出稼ぎの人々は、夫々のふるさとへ帰ります。村は静かになり、寂しくなります。しかし、村では青年団や子供まで主な人達で歌舞伎を上演し、村人は会場の公会堂にご馳走を持って集まり楽しんでいました。村長さんは何時でも主役を務め、私の父は女形を務めていたようです。その様子が父の古いアルバムにありました。

薬取村は小さな村でしたが、豊かな暮らしのようでした。幼かった私が島で楽しかった事といえば、やっぱり川や海で遊んだ事です。

きれいな砂浜が続く浅い海には、小さいカレイの子が沢山いて、砂の中に体を隠して頭だけ出して目が光るので、すぐに見つける事が出来ます。これを私たち子供は、足で踏んだり手拭を広げてすくって遊びます。ところが、カレイの子は素早く砂を舞い上げ逃げ回り、子供たちには中々捕まりませんでした。絵本にも書きましたが、岩場に行くと花咲カニが一杯いて、これを捕まえて遊ぶのも、とても面白かったです。

村の暮らしと言っても、65年以上も前の事ですから、もちろん電気、水道はありません。明かりは石油ランプです。ランプのホヤ（ガラス）の掃除は毎日するのですが、子供の手が丁度ホヤの中に入るので私も手伝いました。水は、井戸もありましたが街の中央に大きな水槽の入った建物があり、山から桶で水が引かれていました。冷たくて美味しい水でした。それぞれの家庭には大きな水瓶があり、街の水槽から、天秤棒で担いで運びました。暖房は薪ストーブです。ストーブの前には大きな炉が切っており、オキを出して五徳を置き、鉄瓶などが掛けてありました。従ってお湯は何時でも沸いており、暖かいお茶などは直ぐに飲めました。

電話は郵便局、役場など村に何個かありました。街には、お店が一軒ありました。このお店は、現在のスーパーマーケットのような存在で何でも売ってました。お米や味噌、醤油、酒類、衣料品、薬、その他日用雑貨なども売ってました。仕入れは根室、函館などの他、東京の「高島屋」などデパートからも仕入れていたそうです。

通信販売も行われていたようです。私の父は、東京銀座の「三越」から買ったと話しておりました。子供の下着などは、このお店で売っておりましたが、母の和服などは解いて、自分で洗い張りをし、染め直し、縫い直しなど今で言うリフォームをして着ていました。冬になると船の往来が出来なくなるので、冬に必要な（越冬用）生活物資は「まとめ買い」

をしていたようです。例えばですが、私の家ではりんごを粉殻の入った木箱で買ってありました。畑の野菜も、いも・人参・大根・ごぼう・キャベツなど何でも採れました。ほかにきゅうり・なすび・豆類も獲れていました。山菜などは、春早くからボクサ（行者にんにく・アイヌねぎ）コジャク・うど・ふき・百合の根など沢山ありました。

戦争も終わり、長閑で平和だった村にロシア兵がやって来ました。戦争は昭和20年8月15日に終わってましたが、村にロシア兵がやってきたのは、昭和20年8月末のことと聞いております。詳しい事は知りませんが、私の家の前には村役場があり、人々の出入りが良くわかりました。

しかし、窓を閉めて外は見えてはいけません！と言われました。子供心にも何かあったと思いました。暫くした夕方、なぜか外が騒がしいので静かに窓から見ると、ロシアの兵隊さんが踊っていました。一人がアコーディオンを弾き、一人または二人でかわるがわる楽しそうに踊っていました。いま考えるとコサックダンスをしていました。とても陽気な人々という印象でした。間もなく、ロシアの家族連れも村にやってきました。しかし、住む家がありません。そこで、駅通や旅館、私達日本人の家を提供して、ロシア人と暮らすことになりました。私の家にも入りました。時々、日中女性が遊びに来てパンの焼き方などを母に教えてました。女性はマダムと呼ばれており、仲良く暮らしておりました。この二人はとても親切な人のようで、私たちが引揚げの時、「今日本に帰っても、日本は戦争に負けて着る物も、食べる物も無いので、小さい子供は死んでしまう、預かってあげるから置いて行きなさい。」と心配してくれました。もちろん、父は、「死ぬときは、親子一緒！」と話し、家族六人で引揚げました。お陰様で子供たちは、現在一人も欠ける事無く元気に暮らしております。

ロシア人が来てから、学校も半分にしまし

た。そのため、学芸会など学校で出来ず、お寺の本堂に舞台を造り歌や踊り、劇などをしました。このお寺は、立派なものでした。

終戦から2年後、昭和22年8月に引揚げる事になりました。学校は夏休みで、私達子供は家にいましたから、お友達に「さよなら」も言いませんでした。絵本にもありましたが、引揚げる時私は小学3年生、8歳でした。引揚げの通達が出てから、出発までどれくらいの時間があったのか、2、3日あったのか。それとも数日あったのか。

慌しく荷物をまとめ、引き揚げの人々は岩山を越えた砂浜に集結させられました。ところが、引揚げることになった人は村の住人の半分だけでした。どのようにして人選されたのかは解りません。例えば、老人がいる家族とか、小さい子供が沢山いる家族とか、また、単純にロシアの命令だったのか。残された人々は、更に1年間ロシア人と共同生活をし、翌昭和23年に引揚げる事になります。

引揚げの時、私の家族は父、母4人の子供の6人でしたが、他に夫を亡くしたお婆さんの家族8人も一緒でしたから、14人の長として、30代の父は大変だったと思います。引揚げ船に乗る時は、薬取は択捉島の最も北に位置していたので、私たちが最初に乗船しました。

薬取の海は、遠浅で大きな船は沖に停泊し、舢舨で乗り降りしなければなりません。この舢舨に荷物と一緒に乗せられた私は、生まれて初めて船に乗るので嬉しくなってしまう、澄んだ海の底を覗いてはしゃいでました。乗せられた引揚げ船は、ロシアの貨物船でした。それから、何日も掛かって次々と島の引揚者を乗せました。

船底から甲板まで人で一杯になりました。しかも、船の中は不衛生でした。蚤、虱、南京虫など、その他トイレの事、飲み水の事、食べ物の事など不潔で不自由なことが一杯でした。今考えると、私たち引揚者は人間ではなく、荷物が動物のような扱いをされていたのです。私たちを乗せた引揚げ船は、根室の

港ではなく樺太の真岡^{まおか}港に着き上陸させられました。

宿舎となる女学校まで、延々と続く道をただ、ひたすら歩きました。大人も小人も、老人も小学3年生の私にとっても、背中に大きなリュックサックを背負っているのも、とても辛いものでした。直ぐ下の妹は小学校1年生と一緒に歩きました。その下の妹は4歳で、父の背負った荷物の上に肩車。その下の妹は、未だ乳呑児で、母が「オンブ」していました。他の家の人々も皆、ただただ歩きました。宿舎になった学校は、まだ9月上旬というのに寒くて眠れない夜もありました。しかもトイレが外で、遠い所にありました。途中、ロシアの兵隊が銃を持って監視しているのです。とても恐かったです。トイレが間に合わず、途中座り込んでシャーと用を済ませた事も何度もありました。

引揚げの時、荷物も制限されました。一人30kgと聞いてます。それで、皆その家の一番大切な物だけ持ちました。私は、大きなリュックに「仏様」と子供の下着を持ちました。他の家の人々は、着物でも振り袖とか留袖など良いものを沢山持ちました。しかし、これらの荷物は真岡で移動の時に、全て盗まれたようです。荷造りの仕方の中味が何なのか、大事なものが入っているという事が解かってしまった様です。

私の父は、アルバム4冊と蓄音機を持ちました。途中で荷物検査があるのですが、無事この検査を通過したようです。この荷物検査で引っ掛かると、全て没収されたようです。この荷物検査を無事通った父のアルバムなどは、日本に来てから大変活躍する事になりました。

戦後作られた写真集の中にある「薬取村」の写真は、父のアルバムから提供されました。また、父の所に行けば写真があると聞いて、遠くから訪ねてきた人が大勢いました。現在のようにコピー機が無い時代、写真を貸しても戻らない時もありました。そのアルバムは、

あちこち貼がされたまま、ボロボロになって実家に残されております。蓄音機の方は、島にいた時は「浪花節」のレコードを掛け、父の友人が集まりストーブを囲んで寝転がって聴いておりました。

引揚げてきてからは、娯楽の少ない時代でもあり村のお祭りや「演芸会」などで何年も使っていました。村の保育所でも使っていました。

ようやく、9月の中過ぎ頃、日本の引揚げ船で函館港に入港しました。ところが、赤痢や麻疹などの伝染病が流行っており上陸出来ませんでした。頭から首から背中、お腹まで息が出来ないほど、真っ白にDDT（殺虫剤）をかけられながら、船の上に一週間位いました。その後上陸しましたが、みんな栄養失調のような状態で多くの人々が亡くなりました。

せっかく、病院に入院出来ても、食べ物や良い薬も無く亡くなる人が多く出ました。私の村の、村長さんの娘さん（小学生）2人も亡くなりました。10代のお兄さん（中学生）2人で、妹の亡骸を一体づつ背負って焼き場に行き、火葬してもらったそうです。この時一緒に入院していた、おじいちゃんも亡くなりました。

村長さんは、村人の半分を島に残して来たため、次の年村人が全員無事に引揚げてくるかを確認するまで函館を動こうとせず、連合軍の占領下でもあり、公職追放令で公職にも就けず、10代の息子さん2人のアルバイトだけの大変厳しい生活をしたそうです。一緒に引揚げた人々は、それぞれの親戚縁者を頼って全国に旅立って行きました。

ちなみに、引揚げの時一緒だったおばさんの家族は、無縁故ということで、網走管内の小清水町に行き皆で働きました。皆で働いても父親の無い家族は、大変な生活だったようです。それで、子供たちが独立するまで父は折に触れ助けていたようです。

私達は、おばさん一家と別れ根室管内の別海町西春別に行きました。戦後の食糧事情は、

私たち引揚者ばかりでなく皆が貧しく、品物不足でもあり手に入らない時代でした。その頃私は幼かったので、父や母の加護のもと少々寒かったり、お腹が空いたりしても幸せなものでした。

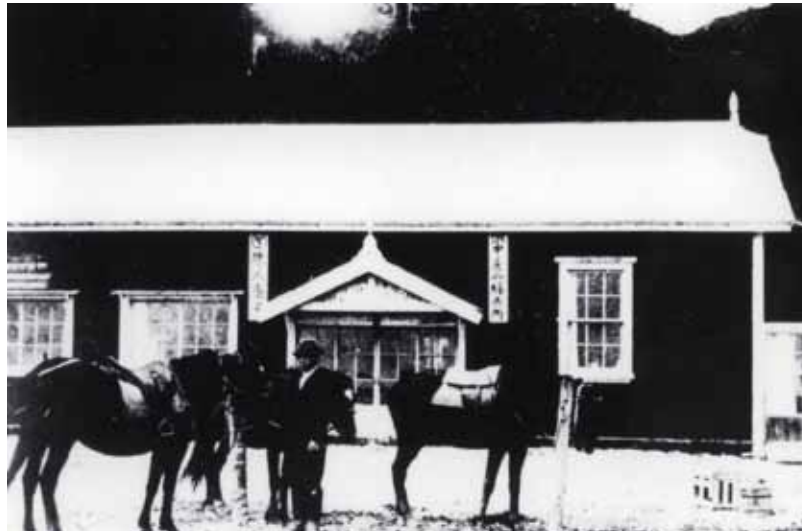
四島（しま）に住むロシア人は変わりました。私の故郷蘂取は、今は人が住んでおりませんが択捉島の中心部の紗那には、人が大勢住んでおります。初めて墓参で島を訪れた平成3年頃は、写真撮影も制限されました。また、警備隊が銃を持って付いて来て、ずいぶん怖いと思いました。しかし今では、墓地の草刈をしてくれたり、カニを茹でてご馳走してくれたりします。島の暮らしは豊かなようで、住民の服装も以前とは違い綺麗でした。また、国後島でもそうでしたが、島民の多くは、日本の中古車を持っています。乗用車の他、〇〇商店という屋号や大きな文字が書かれたままの中型トラックも走っていました。お店の棚にも商品が沢山並んでおりました。幼稚園、学校、病院などは新しく建てられています。飛行場の建設、港の拡充、道路の拡幅・舗装工事などインフラが大分進んでいるようです。今住んでいるロシア人は、日本人ともしっかり仲良くしたいと話していました。

最後になりますが、私たち元島民は長年に亘り、北方四島返還運動を行って参りました。しかしながら、父も母も生きている間に四島は戻りませんでした。また、皆様ご存知の通り、昨年11月メドヴェージェフ大統領が国後島訪問以来、ロシアの高官が次々と北方四島にやって来ます。ロシアの政治情勢は、色々と変化しています。それ故、私たち元島民が取り組んできた北方四島返還運動は、ますます難しく遠くなって行くようにさえ思えてきます。皆様、北方領土問題は私たち元島民だけの問題ではないのです。国民ひとり一人みんなの問題と私は考えます。

どうぞ、私たち元島民の「四島への思い」を、お汲み取り戴きたく、お願い申し上げ終わります。

国 後 島

泊村中、古丹駅通と
どさんこ馬



泊村東沸郵便局

古釜布沖からの
国後島



【埼玉県会場】

- 開催日時 平成23年11月30日(水) 12時40分～14時00分
- 開催場所 彩の国すこやかプラザセミナーホール
- 開催団体 埼玉県地域婦人会連合会
- 参加者 80名

元島民二世の訴え



北方領土の早期返還を求めて

国後島元島民二世 白 崎 賢 哉 さん

私は、「日露通好条約」締結から100年目、島を奪われて10年目の1955年昭和30年に根室郡和田村、今の根室市で生まれました。父、母共に国後島出身で、私は元島民二世になります。

私の生まれた所は、酪農と林業で成り立っている小さな集落で、根室市街から西に約20 km、根室半島のやや付け根辺りに位置し南に太平洋、北にオホーツクのどちらの海も見える所に位置しています。根室は漁業のイメージが強い街ですが、根室地方の酪農の発祥の地でございます。夏、サンマ漁が始まると夜の太平洋は漁り火がキラキラ輝き、大きな町が出来たように見えます。それとは対照的に、オホーツクはそのような派手さは無く暗い海なんです。突然何本ものサーチライトが海や空を照らし、激しく交差することがあり怖い感じを受けました。その様なことがあった翌朝には、必ずテレビで「昨夜、根室管内の漁船がソ連の国境警備隊に拿捕されました。今年に入って、すでに何隻目、です。」と放送されていました。

拿捕事件があると、私の周りの大人たちは「またロスケは日本から盗んだ海で、日本人をいじめて憎たらしい奴らだべ。」と言って

怒っていました。拿捕されると、乗組員は3ヶ月から長い人で3年間位抑留され、帰ることは出来ません。

1946年、昭和21年4月に第1号の拿捕があり、これまでに1,339隻、9,489人が拿捕され、拿捕の際行方不明になったり抑留中に自殺したりして31人が戻ってきていません。

皆さん知ってのとおり、日露の条約上の国境確定は19世紀半ば1855年2月7日「日露通好条約」により、択捉島と得撫島^{うるつぶ}の間に国境線を引き、樺太については日露の混住の地とした事に始まりますが、25年後の1875年5月7日「樺太・千島交換条約」、50年後の1905年9月5日の、「ポーツマス条約」の樺太の北緯50度以南の日本への割譲と2つの条約により国境は変わってきたわけですが、択捉・国後・色丹・歯舞群島が条約の変遷によりロシア領になったことはないし、もちろん他の国の領土になったこともありません。

「日露通好条約」の締結により、日本領になって今年で156年経ちました。日本が実効支配したのは90年間、ロシアが不法占拠して66年経ちました、後24年経つとロシアの不法占拠も90年になってしまい、日本が支配した年数と並びます。もちろん、実効支配の年数

で領土の所有権が移るわけではありませんが、その「日露通好条約」締結前の北方領土はどうだったかと言うことを話してみます。

13世紀末、東北の豪族「安東氏」が東北での争いに破れ蝦夷地^{えぞち}に逃げてきて、アイヌ人を使って漁場の経営や、アイヌ人と交易をしたのを始まりとして、その後、次々と東北の豪族が北海道に進出してきました。

15世紀には、やはり東北の豪族「蠣崎氏」^{かきざき}が、和人に対するアイヌ人の反乱を鎮めて蝦夷地を平定し主導権を握って、樺太や北方四島を行き来し、交易や魚場の経営を拡大していきました。

江戸幕府になり「蠣崎」から「松前」に名前を変えた松前藩は、1715年に択捉・国後・色丹に守備隊を駐屯させ北方の警備をしています。一方ロシアは、16世紀から領土拡大のため南下政策を推し進め、ユーラシア大陸をヨーロッパとアジアに分けるウラル山脈を越えシベリアに進出しましたが、それ以上の南下は清国の抵抗にあい諦めました。

シベリアは、高級毛皮が獲れる野生動物が多かったこともあり、毛皮を求め移動し集落を作りながら、その支配を東へ東へと拡大して行き、カムチャッカ半島に到着したのが18世紀の初めで、択捉島の北側、得撫島^{うるつぶ}に到着したのが19世紀ですから、この島々において日本とは約400年の時差があるのです。

また、ロシアの文献によれば得撫島^{うるつぶ}は無人島であり、日本・ロシアの双方はたまに上陸する程度であったそうです。得撫島は日露の緩衝地帯であり、得撫島より北をロシア領、南の択捉・国後・色丹・歯舞群島は日本の領土と言う暗黙の了解があり、住み分けが出来ていたそうです。また、得撫島より北に住むアイヌ人は、択捉・国後・歯舞群島・北海道のアイヌ人と言葉が違っていたし、ロシアが進出してきてからはロシア正教徒の洗礼を受け、ロシア名を持っていたそうです。

「日露通好条約」の締結に関して言えば、軍事力に怯えてアメリカと交わした「日米和

親条約」と比べると、日本もロシアも極めて紳士的で友好的な雰囲気^{ふんぎ}で結ばれたと言われています。しかし、皆さんがよくご存知のとおりソ連は、1945年8月9日当時有効であった「日ソ中立条約」を一方的に破棄して日本に参戦し、火事場泥棒のように同年9月5日までに樺太・千島を含む北方四島を不法占拠しました。そして、66年が経過しましたが、未だに解決の糸口が見えてこない状態が続いているのです。

私の両親は国後島の出身なので、国後島の概要をお話します。国後島は南側半分の泊村、北側半分の留夜別村と2つの村がありました。国後は、全長122km・幅6kmから30km・面積1,499km²。オホーツク海側の海岸は急傾斜の断崖絶壁に対し、太平洋側は比較的傾斜が緩く平坦地も多く、海岸線は出入りがあり天然の良港で豊かな漁場になっていました。このため、多くの村は太平洋側に集中し、島の人は漁業に従事したり魚介類の加工場で働いていました。

また、用材としての利用価値の高いエゾマツ・トドマツなどの針葉樹の森林地帯が広がっており、漁場が閑散期の11月から4月位まで島の人達は木材の切出作業や製材工場の作業員として働き、経済的に恵まれた豊かな生活を送っていました。

当時は、漁業や林業の運搬力として「農耕馬」を使い、交通手段として「道産子」を使っていたこともあり、牧畜業として馬を育成し軍馬としても供給していました。また、牛も肉用牛として飼われ本州方面に出荷され、牛乳は島民に提供されていたそうです。

食生活ですが、肉類は熊・鯨・トド・鴨等の肉も食べていましたが、不足しがちで海鳥の肉や卵を取って、肉不足を補っていました。魚介類や、海草類は安く手に入れることができました。蟹はタラバガニが珍重され、花咲蟹や毛蟹は捨てていたそうです。野菜は北海道と同じ物が採れ、春になれば、フキ・コゴミ・ワラビ・ギョウジャニンニク等の山菜が

採れ、米・味噌・醤油以外は自給自足の食生活で暮らすことができ、商店には品揃えも豊富で日常生活に不便をすることは無かったようです。

島には温泉が多く、砂浜を掘るとお湯が湧きだし、島の人達は食べ物の煮炊きに活用していたそうです。よく知られている温泉だけでも13か所あり、旅人が楽しんだり島民の湯治の場として利用されていたと言います。また、オホーツク側の古丹消と言うところでは、地熱を利用して葡萄やスイカも栽培していたそうです。

昭和20年8月15日の人口データによると、四島には3,124世帯17,291人、択捉島894世帯3,608人、色丹島206世帯1,038人、歯舞群島852世帯5,281人住んでおり国後島には、四島の人口の43%に当たる、1,327世帯・7,364人住んでいました。今の四島には、ロシア人が16,860人が住み、そのうち国後には約6,900人住んでおり、その80%の人が漁業に従事し、専業農家はごくわずかにいるだけで、牛や豚も副業的に飼われています。

牛は、市街地に放牧されていて、ビザなしで行った日本人はゴミ箱の中の生ゴミを漁って食べている姿を見て「野良牛」と呼んでいます。

島には舗装道路がほとんど無く、凸凹の砂利道ですが車は結構なスピードを出して走るので土埃が舞上がり、後ろを走る車は前が見えなくなります。交通事故は頻繁に起こっています。車は日本の中古車がほとんどで、乗用車は道路事情もあって四輪駆動車がほとんどです。小型トラックには日本語で商店の名前とか建設社の名前が書かれたまま走っていますが、それが格好良んだそうです。

住宅は、2階建ての集合住宅がほとんどで、木造やブロック造りで塗装はされていますが、車が立ち上げる土埃で遠目には全部灰色に見え汚いです。家の中は綺麗にされていて、壁紙は自分で好みの物を買って張っていて、綺麗にしています。

水道は、水源の水質はいいのですが、水道管を通ってくると水質が悪くなるそうで、慣れない日本人が飲むと下痢をしたり、赤痢になるそうです。ビザなしで行く日本人は、ミネラルウォーターを持ち込んだり島で炭酸ミネラルウォーターを買って飲んでいます。トイレは水洗ですが、流れが悪いので半固形物は流れにくく、詰まり易いです。トイレトーパーは、使用后トイレに流さないでトイレの中にある籠に入れ、それを回収しトイレトーパーとして再生しています。それでも、最近は少数ですがシャワートイレやジャグジーの風呂をつけているところもあります。

商店には、ロシア製はもちろんですが日本製、韓国製、中国製などの海外からの商品も沢山置いています。特にインスタント食品は韓国製が多く目立ちます。

教育は、7歳から始まり、小・中・高・3年・6年・2年の一つの学校での一貫教育で9年生までは義務教育、10・11年生は個人の自由で11年生まで就学した後は大学受験資格が与えられます。大学への進学率は80%だそうで、四島には大学が無いのでサハリンとか大陸に行きます。新学期は9月1日に始まり、翌年の5月31日まで。6月から8月31日までの3ヶ月間は夏休みで、裕福な家庭はロシア本土に旅行に行ったり、裕福でない家庭の子供は島の林間学校に行ったりして過ごすそうです。宿題も沢山出るそうです。夏休みの期間、島では鮭・鱒漁の操漁が本格的になるので、ロシア全土から大学生がアルバイトに来て賑やかになります。

択捉・国後・色丹には病院があり、医者・医療器具はある程度揃っていますが、医療器具に使う消耗品が手に入らないので、折角の医療器具が使えない状態で、医薬品も不足しているので重篤の患者はサハリンや、人道支援により根室で治療を受けます。ロシアでは医者や学校の先生の収入は低く、漁船員のほうが収入は多いようで、医師や教師は漁船に

乗って働いている人もいます。

私の父は、大正6年に国後島の留夜別村植内で生まれました。父の父は、ウエンナイ尋常高等小学校の校長をしていましたが2歳半の時亡くなり、昭和元年9才の時根室に移り住んだため島の思い出は少ないのですが、国後での馬とのふれあいが忘れることが出来なく、高等中学校を卒業後根室にあった柳田牧場に就職し、牧畜のイロハを学び独立しました。そして終戦後、軍隊から復員し、酪農に転向し家族を養いました。これからお話しすることは、母からよく聞かされた話です。

母は、3人姉妹の長女として大正11年に国後島の南側半分の泊村、四島で一番大きな街ふるかまつぶ古釜布で生まれました。娘盛りを古釜布で過ごした母は昭和18年、21才で根室の父の下に嫁ぎ、翌々年の昭和20年3月には長男が生まれましたが、父は3度目の召集で旭川に出征していました。8月15日に終戦を迎えましたが、残務整理のため復員の見通しが立っていませんでしたので、母と長男は古釜布の祖父母と2人の妹に、長男を見せるため里帰りをしたのが昭和20年8月28日でした。

この日は、満州と樺太の日本領を占拠したソ連の第一極東軍が択捉島に上陸した日です。9月1日の朝、古釜布の湾に灰色の軍艦が現れ、偵察機が旋回しソ連軍が上陸して来ました。島民は欧米人を見るのは初めて、アメリカ軍が来たと思い込み星条旗を書いてそれを振ってソ連軍を出迎えた人もいたそうです。

一方、ソ連軍は逆に「アメリカ軍は来てるか？アメリカ軍は島に上陸してないか？」と聞きながら上陸してきたそうです。ソ連の兵隊達は、ヨレヨレ・ボロボロの軍服を着た者や、日本軍の軍服を着た者など様々な服装をした兵隊達で、また女性の兵隊もいたそうです。ソ連兵は、自動小銃を携え民家一軒々家宅捜査し、貴重品や日用品等を略奪していききました。これに抗議や抵抗して暴力を振るわれた者は大勢いて、射殺された者（泊村村長

澤田喜一郎）さえいました。祖父母の家も略奪にあい、怖い思いをしたそうです。

ソ連軍は、9月4日までに国後を完全に制圧し、島民を監視下に置いて13才以上の男女には労働を強制し、住宅はソ連兵の宿舎にするため日本人が住んでいる住宅を半分に仕切り、生活を始めました。

船を持っている人は、霧の深い夜とか嵐の夜、濡れたムシロを焼玉エンジンに被せ音を消して脱出を謀るのですが、発見されて銃撃を受け死ぬ者や嵐で船が転覆し亡くなる者、根室を目前にして波にさらわれた人も大勢いました。国後の浜や根室の浜には何十体もの遺体が打ち上がることもありました。ソ連軍が、船と住民の監視を更に厳しくすると脱出することも出来なくなり、人々は島に留まるしかなくなりました。

翌年の3月頃、今度はロシアの民間人が島に上陸し、兵隊達と同じように日本人の家を仕切って住んだり、物置に住んだりしました。ソ連社会でも人種差別があるようで、民間人はキルギスタン人・タジキスタン人・ウズベキスタン人・カザフスタン人の人たちで、白系ロシア人はいませんでした。今でも北方四島にはこういう人たちが多く住んでいます。

ロシアの民間人は、日本人と一緒に漁業や木材の切出し、缶詰工場や木工場等の仕事に就き、日本人の器用さと勤勉さと仕事の要領の良さに感心し一生懸命習おうとしていましたが、日本人のようには旨く出来なかったそうです。女性たちは、日本人に畑の作り方などを教えてもらっていました。

民間人の多くは家財道具の持合せが無く、食べ物もままならない者や着る物にも事欠き、女性は麻袋を腰に巻き寒さを凌いでいる者もいました。侵略者だと言っても、困っている者を見捨てるわけにもいかず食料や衣服、日常品を分け与えたりして助けました。

日が経つにつれ、言葉も何となく通じ合うようになり、近所付き合いの関係が出来てきたのですが、日本人の目が届かないところで

は物を持ち去ったり、気に入った物があると手に入れるまでねだったりと常識が通じないところがあり、気の抜けない毎日だったそうです。日露双方の子供達も、日本語とロシア語を旨く使い分け仲良く遊んでいました。

ソ連政府は、昭和22年10月24日から日本人を強制送還し始め、母達は昭和23年9月上旬、(立春から数えて210日辺りで台風の季節に)強制送還されることになりました。この抑留されていた3年の月日は、島の気候風土や漁場や漁業の方法、缶詰工場や木工場の稼働方法をロシア人に教えるための年月だったようです。

島民は米・釜・日用品を背負い、舢舨で沖に止まっている1万トンを超える貨物船に行き、貨物船のクレーンから吊られたモッコに荷物を置き、その上に乗って乗船するのですが、モッコが吊り上げられると人と人の隙間がなくなりオシクラ饅頭になり、身動きできない状態のまま建物の4階ぐらいまで引上げられ、下を見れば大海原で白波が船体にぶつかりユラユラと揺れ、乳飲児や子供達はもちろん大人まで息苦しいのとその恐怖で泣叫び、そして甲板に軟着陸するかと思いきや、2mくらい上からドスンと落とされ怪我をした者もいたそうです。船は、根室に向かうのかと思いましたが、樺太に向かうとのこと。1週間程乗船していたようです。

おりしも台風が近づいて、雨風と揺れがひどく雨が便所に入り、溢れ出た糞尿が船内に漂い船の中の衛生環境は劣悪な状態で、大抵の人は船酔いになり吐いた物が更に悪臭を放つ、そんな状況の中で食事も摂れず死ぬ人も出てきました。死んだ人は水葬に伏されるのですが、何のセレモニーも無く船上から海に落とされるのです。

収容先は樺太の^{まおか}真岡女子中学校の校舎、集められ収容されている日本人が多いため、母達はしばらく戸外で生活をしていたそうです。9月中旬とは言え真岡は北緯47度、秋の中ごろです。昼は暖かいのですが、夜から朝

方にかけて冷え込むので、女学校の校舎の板を剥がして焚き火をして暖をとるのです。日本人が送還され校舎に余裕が出ると、校舎の中で生活できたのですが壁が無くなっていたので、やはり寒さは同じと言うか冬に向かっているので寒さは更に厳しくなっていました。

また寒さの中、服を脱いでシラミや南京虫退治をするのですが、指で潰すと吸われた血で真っ赤になり、歯で噛み潰すと口が真っ赤になりました。島を出る時持ってきた米はすぐに底を尽き、配給されるコーリャンのお粥と、ニシンの塩漬けで飢えを凌ぐのですが、食べられない食事は一口、二口はのど元を通るものの三口、四口とはなかなか食べられないものでした。しかし、それさえもあたらず、寒さと栄養失調で亡くなる人が毎日のようにいました。また、地面に溝を深く掘って板を渡しただけの、仕切りの無い便所に落ちて死ぬ子供も多く、毎日が死と隣り合わせの悲惨な日々でした。

そこで、3ヶ月位生活し、やっと日本に帰る順番が来ました。真岡から函館の航路は冬間近で、波が高く荒れ模様だったのですが、真岡の生き地獄から抜け出せる嬉しさで、苦しかった記憶はありません。

真岡から函館に向かう時の悲しい思い出として話すのは、ある若いお母さんは乗船する前に赤ちゃんにオッパイを与えていたのですが、栄養失調が原因で赤ちゃんが亡くなりました。死んだ者は船に乗せられません。その亡骸を樺太の真岡に置いていくのが忍びなく、悲しみに堪え、亡くなった子に毛糸の帽子を被せオムツし、その上から「ネンネコ半纏」をはおり、子供が生きているかのようにし、何昼夜も寝ないで函館に運んだお母さんがいました。船から下りたら死んだ子供を背中から下ろし、両手で抱いて何時間も泣いていたそうです。そして、母の話はいつもシラミ退治のため頭の上から爪先にパンツの中までアメリカ製の殺虫剤DDTをかけられ全身

真っ白くなって終わります。

このような思いをして、私の母達は故郷の国後を追われ函館に着きました。このような話を母から聞いて育った私ですが、オホーツクの海に怪しいサーチライトが交差し、何やら怖い感じが受けても幼いころから怖いもの見たさの好奇心が芽生えていました。

平成7年、ビザなし交流で国後島に行きました。日本の領土とか、父母の故郷とゆうことは頭にはなく、物見遊山で見えるもの聞くもの食べるもの、その全てが珍しく新鮮に感じ、ウオッカもとても美味しく飲むことができました。しかし、港には沈船が何隻も放置され廃油が漂っており、街並みは色の無い灰色の住宅が建ち並び建設途中の住宅も、資材が大陸から届かないとの事で工事の再開もままならない状態。道路は車の腹が引っかかる位とんでもなく凸凹、車はそれを避けて右に左にと蛇行しながら走って行く、このような状況の中でロシア人は生活していました。

翌年に、74歳になった母を連れて行きました。強制送還から48年目の帰郷、山や湖を見ては「昔と変わらない」と呟き、河原で日本人の使っていた三平皿の破片を見つけては嬉しがり、日本人墓地では涙を流しながら手を合わせ、自分の家の跡地に立ちつくし、街並の汚さを見ては悔し涙を流していました。それでも、抑留時代の3年間で覚えたロシア語で、ホームステイ先のロシア人と談笑し、当時を懐かしんでいるようでした。

私は、自分の故郷にすぐ帰ることが出来るので、故郷を懐かしむ事も無いですが、永く帰れなかった故郷にはその年月の望郷の念が積重なり故郷を想う気持ちが大きくなり、故郷を汚されることは自分を否定されたのと同じ事。そして、人には帰りたい時に何時でも温かく迎え入れてくれる故郷が必要だと、母を見て熟々思った次第です。私は国後には10回以上行っていますが、段々と父母の故郷が自分の故郷のように思えてきました。

北方領土返還といえば黒塗りの街宣車、大

音響での軍歌そして島奪還を叫ぶイメージを強くする人もいますが、根室地方にはそのような派手な活動や運動をする団体・組織はありません。私が加盟している千島歯舞諸島居住者連盟の運動は地味なのですが、北方領土返還運動の中心となり国の外交の後押しを担っているという意識を強く持っています。地味さゆえ、国民へのアピール度が足りないと言われればその通りなんだろうと思います。

そこで後継者の置かれている状況ですが、平成23年3月31日現在の千島歯舞諸島居住者連盟の正会員数4,137人。その内訳は、元島民2,545人（61.52%）、二世1,527人（36.91%）、三世四世65人（1.57%）となっています。元島民の平均年齢も78歳になり、返還運動の最前線から遠のいて行く状態となっていますし、自然減になっていくのも致仕方ないことと思っています。また、この運動の中心的役割は、我々二世が担っていかなければならないのも当然の事と思っています。

しかし、私たち二世1,527名の中で実際に返還運動に携わっている人数と言え、1割に満たないのが現状でございます。自分たち二世の平均年齢も50歳です。社会の中心として活躍し、職場では主軸として働かなくてはならず、家庭では子供の進学などで沢山のお金が必要としている時の大黒柱として、それぞれの場面で重い責任がのし掛かっている年代でございます。

返還運動のため仕事を休めば、職場の同僚に仕事の負担を掛けてしまうし、この不景気で人余りの今、雇用環境が不安定の中で返還運動を一生懸命にやればやるほど、雇い主から嫌みの一つ二つ言われ、または解雇の言葉を聞く可能性もあります。このような状況の中で自分達二世も、二世を従業員に持った雇用主も、お互いの立場でギリギリのところまで精一杯頑張っていることを理解していただきたいと思っています。

領土問題は存在しないと言い続けていたソ

連は、ソ連社会の体制崩壊の危機に陥ると日露間に領土問題は存在するとゴルバチョフが言い、新生ロシアになってエリツインは経済協力が欲しくて2000年までに解決しようと言い、そして今エネルギー大国になったロシアは、北方領土は戦争の戦利品、日ロ間に領土問題は無いと言いながら、北方領土をちらつかせ日本の技術と経済を誘導しようとしています。

日本は主権を持っている国です。主権国家と言うのは国民の生命と財産、そして国土を守るのが万国共通・基礎的な考えです。主権の無い国はありません。

私たちは、日本の抱えてる領土問題を解決し二度と領土問題を起こらないようしっかりした考えを持って日本のメッセージを海外に発信し、私たちの子供・子孫にこの国土を引き継ぐ義務があります。そして、どうかこの北方領土返還運動をここに居る皆様方の力をお借りして、国民全体の問題として全国に広げて行きたいと心から願うものであります。



北方領土の早期返還を求めて

多楽島元島民 河田 弘登志 さん

ただ今、ご紹介をいただきました河田弘登志でございます。出身は、北方領土・歯舞群島の多楽島です。現在は、未だに返還されない我が故郷の島々が間近に見える、根室市に住んでおります。

この度は、埼玉県地域婦人会連合会にお招きをいただきありがとうございます。実は私、北方領土関係で埼玉県に来たのは5回目です。最初は、昭和44年10月に根室市の青年で編成した北方領土早期返還促進キャラバン隊の一員として、マイクロバス2台と乗用車1台に分乗して街頭宣伝をしながら、青森県から始め三重県まで13都県庁、12市役所を訪問した時であります。その後、昭和57年と58年に根室市の観光と物産、そして北方領土返還のPRでそれぞれ1週間程滞在したことがあります。

埼玉県地域婦人会連合会の皆様に、私の話を聞いていただくのは平成5年6月以来2度目です。毎年、全国各地から北方領土現地視察や関係行事等で大勢の方々が根室市にお出でになりますが、その時にお会いした方、ご指導頂いた方が本日お集まりの皆様の中にもいらっしゃるのではないかと思います。

埼玉県と北方領土の関係について少し触れてみますと、今から130年も前（明治初期）から北海道や北方領土の海産物、特に鮭やマスなどを大量に仕入れ、中部地方から関東や東北地方にまで広く売りさばき、買い付けには択捉島まで行ったという永徳屋商店の記録などがあります。また私の同級生をはじめ、島を追われた元島民100人以上が埼玉県に住んだという、大変深い関係にあります。

北方領土、または北方四島とも言いますが、北海道の根室半島に連なる歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島で面積5,036km²、千葉県や愛知県、福岡県と同じ位の面積です。周辺海域は、世界三大漁場と言われる恵まれた環境の中で、漁業、水産業を中心に17,291人が生活しておりました。

歯舞群島には水晶島、秋勇留島、勇留島、志発島、そして私が生れ育った多楽島と人の住んでいた五つの島があることを、あまり知られていないように思います。特に歯舞群島の周辺は、昆布の宝庫で北方四島の30%約5,300人が生活しておりました。実は、歯舞群島約100km²は根室市の面積512km²の中に含まれており、従って根室市の5分の1が今ってロシアに不法占拠されております。

私の生まれ育った多楽島は、歯舞群島の最東端で納沙布岬から約45km離れた所にある面積12km²の平らで小さな島です。島の中心地古別^{ふるべつ}には、学校やお寺、郵便局、無線局、巡査駐在所あるいは水産物検査派出所、駅通や診療所等の公共施設が集中しておりました。人口は231世帯、1,457人、私が5年生まで通っていた多楽国民学校の生徒も239人と北方四島39校の中で一番多く、人口密度も一番高い島でした。

北方領土は、私達の祖先が3代5代に亘って雑草を一本一本手で引き抜き、正に血と汗で開拓した土地であります。私の祖父も明治の代に、両親は大正の初期から多楽島に定住するようになり、私も島で生まれ11歳まで住んでおりました。

島の周辺は昆布の宝庫で、質量共に大変良

く主産業は漁業でしたが、特に昆布採取が盛んでした。昆布漁の始まる春5月から半年間は、非常に忙しくなり朝早くから夕方遅くまで、大人も子供も一家総出で寝る暇もないくらい一生懸命働きました。このように厳しい生活の中にあっても、島をあげての運動会やお祭り、学芸会、青年団の趣向を凝らした演芸会など、娯楽の少ない島にあっては最高の楽しみでした。

辛いこと悲しいこと、また楽しいことや嬉しいことなども皆で分け合い、島中が一つの家族のように助け合いながら仲良く、当時戦時中ではありましたが和やかに暮らしておりました。

ところが、昭和20年8月15日敗戦という日本人にとって忘れられない日を迎えました。敗戦のショックから、何とか気を取り直して生産に励もうとしていた矢先の8月28日から9月5日の間に、北方領土はソ連軍に不法占拠されてしまったのです。まさかソ連軍が上陸して来るとは思っていなかった島民は皆びっくりしました。新築したばかりの我が家も、二人のソ連兵が土足で上がり込んできて銃を突きつけアメリカ兵を匿っていないか、銃を隠していないか等と言いながら、天井を突いたりして家捜ししました。また、トッキー トッキー、サッキーサッキーと言って腕時計や酒などを欲しがりました。

私たち兄弟5人は、親の背に隠れるようにして恐る恐る見ておりましたが、引き出しから剃刀やバリカンを持っていきました。若い女性などは、何をされるか分からないということで変装して納屋や物置とか押入れの中などに隠しました。

ソ連軍は、島の中心地の古別に進駐して、学校や無線局等公共施設は全部占拠してしまい、頼りにしていた日本兵は間もなく何処かに連行されて行きました。後に聞いたのですが、シベリアに何年も抑留されていたそうです。無線も切られ、本土との通信も全く途絶え、ただ飛び交うのは不穏なデマばかり。他

の島では、村の責任者が銃殺されたところもあります。私の島でも銃殺寸前ということがありました。9月といえば漁期の真っ最中で、私も父と夜「いか釣り」漁に出て発砲されたことがあります。

毎日、毎日銃口を突きつけられての生活、そして通信は途絶え夜間の外出も出来なくなり、島民は次第に不安と恐怖が募り、止むなく夜陰に乗じて身の回りの物を少々持って、小舟で脱出するようになりました。

通常ですと、5～6時間で楽に根室港に着くのですが、ソ連軍に発見されないようにエンジン音が聞こえなくなるずっと沖合まで手で漕ぎ、更に途中のソ連軍に気づかれないように大きく迂回するわけですから、通常の2倍も3倍も時間が掛かります。

出港する時は、風の良い時を見計らって出るのですが、これだけ時間が掛かりますと秋の海のことですから、途中で時化^{しげ}に遭い水船になって目的地以外の海岸に漂着し、命からがら地元の人に助けられた人も沢山おり、66年過ぎてもまだ着いていない人もおります。これらの人達は、どの様になったかということはお解り頂けると思います。

私は学校にも行けず、友達もいなくなった島で遊び相手になってくれていたアレキセと呼んでいたソ連の将校に、ある日学校に行きたいということを話しました。彼は11年間学校に行ったと言い、子どもは勉強しなければいけないと言って北海道に行くことを許可してくれたのです。

昭和20年11月末、たまたま島に来ていた親戚の船で2歳下の弟と2人で島を出るようになりました。その時、アレキセは「学校が終わったらまた島に帰ってこいよ」と言って学校から新しい机を2個持ってきて、北海道に行っても机が無いと思うからこれを使いなさいと言って見送ってくれました。もちろん、新築したばかりの家もあり、両親や弟妹達もいるわけですから学校が終わったらすぐ帰ってくるよと約束したのですが、ついに帰るこ

とが出来ず両親や弟妹達と再会したのが、それから2年以上後の雪もちらつく頃でした。

先程もお話したように、北方四島には当時17,291人の人が住んでおりましたが、その内の約半分は一時避難的に島を脱出したのです。そして、残った約半分は昭和22年から23年にかけて強制送還させられました。島に残って住むのであれば、ソ連人として帰化して残るか、そうでなければ強制送還ということで二者択一を迫られたわけです。

私の家族も昭和22年9月6日の夕方、突然帰国命令（強制送還）が出て、1時間以内に大急ぎで身支度をして船に乗り込んだそうです。そして隣の志発島に約40日間収容され、またソ連の大きな貨物船に網目の大きなモッコで貨物同然の扱いで積み込まれたそうです。数時間後には、根室の港に着くものと思っていたのですが、中々着かないので甲板に出て星を見たところ、船は北へ北へと走っており着いた所は樺太の真岡港まおかだっそうです。

ところが、先に送還されて来た人が大勢いて、収容する場所が無かったのか暫く上陸することが出来ず、港を出たり入ったりしながらトイレも満足に付いていない貨物船の船倉の中で1週間もぎゅうぎゅう詰めにされ、誠に汚い話ですが甲板の上で用を足したそうですが、それが波をかぶると諸共頭からかぶったそうです。

樺太では、かつての女学校を1坪位に仕切り、むしろ筵を敷いただけの所に6～7人入れられ、1ヵ月も日本からの引き揚げ船を待ったそうです。食事は、黒パン1切れと大豆の入った薄いスープ位で、空腹と寒さをしのぐのに大変で、誰もが栄養失調になり随分と多くの老人や子供が日本の土を踏むことなく死んでいったそうですが、ただ穴を掘って凍った死体を転がしてあるだけで、一握りの土もかけてあげることができなかったと、平成13年に88歳で亡くなった母が、何時も悔やんでおりました。我が家を出てから、根室に着くまで3ヵ月余りの長旅で、食べる物も着る物もな

く、着の身着のまま裸一貫とは正にあの時の事を言うのだと思います。本当に見るも哀れな姿でした。

皆さん、去る3月11日の東日本大震災の様子を、テレビや新聞等でご覧になったと思います。罹災された方々には、本当に言葉で言い表す事が出来ないくらいお気の毒なことで他人事とは思えません。それは私たちも、66年前に全ての財産を失い同じ様なことを体験してきたからです。満足な仕事も無く、衣食住全てが自給自足で国からの援助もほとんどありませんでした。

当時の根室は、終戦のちょうど1ヵ月前に空襲を受け、街の中心部の8割りが焼け野原となり、罹災を受けた町民でさえ住む家もなく、まだ煙の立ち込めている中に島を追われた多くの人が避難してきたのです。物置や馬小屋、防空壕の中など、とにかく雨、風しのげる所であれば、どんな所にでも身を寄せ合いながら、冬になると回りに凍ってくるような朝起きると薬缶のお湯が凍っているような所で、何年も過ごしてきました。

今更申し上げるまでもなく、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の北方四島は、歴史的にも、国際法上からみても紛れもなく日本固有の領土であります。面積の大小、資源の有る無しだけではなく、国家の主権と尊厳に係わる問題であります。また、北方領土問題は元島民や一地域、一部の人々だけの問題ではなく1億3千万全国民一人ひとりの問題です。

北方領土が、ソ連・ロシアに不法占拠されてから66年が過ぎました。昭和20年8月15日（1945年）終戦、その1ヵ月前に根室は空襲で街の中心部80%を焼失しました。罹災者の援護や、脱出してきた島民の受入れに不眠不休で当たっていた混乱の中で、当時の安藤石典根室町長が昭和20年12月1日、連合国軍司令官マッカーサ元帥に対して「北方領土を米軍の保障占領下に置いて欲しい」と陳情、返還要求運動の狼煙をあげてから66年になります。

しかし、全国民の問題と言いながら、国民運動と言いながら北方領土問題に関心がない、知らないと言う人がまだまだ多いのではないかと思います。昭和56年に2月7日を「北方領土の日」と定めました、これすら知らないと言う人がたくさんおります。誠に残念なことであります。これはやはり、次代を担う青少年が学校教育の中でしっかりと領土問題を学習できるようにしなければならないと思います。小、中、高校、大学と一貫した領土教育、そして公民など社会教育の中でも取りあげて頂くことが必要だと思ひます。そして、高校、大学の入試、就職試験等には必ず北方領土問題を取り入れていただきたい。特に官公庁等は率先して実施していただきたいと思ひます。領土問題を勉強しなければならない、という環境を作ることも必要でないかと思ひます。

百聞は一見にしかずと申します。根室の納沙布岬から、わずか3.7キロ沖合の貝殻島までロシアに不法占拠されているという現実を、一人でも多くの方に見ていただきたいと思ひます。元島民も既に半数以上が亡くなりました。残った約7,500人の平均年齢も78歳になります。私たちは、これまで一日として休むことなく返還運動を続けて参りましたが、残念ながら未だに解決の糸口さえ見えないというのが現状であります。

こうした中で昨年11月1日、ロシアのメドヴェージェフ大統領が国後島を訪問したことは、まさに元島民などの心情を逆撫でしたものであり、許し難く怒りに耐えないものであります。私たちは当日、台風の影響で暴風雨のなか納沙布岬で「北方領土返還原点の声緊急集会」を開催し、ロシアはもとより全国、全世界に向けて怒りと抗議、そして北方領土は我々の故郷であり、日本固有の領土であることを声を大に叫びました。

私たちは、これまで一貫して北方四島の一括返還を基本方針として運動して参りました。今後とも、この基本方針を堅持して粘り

強く運動を続けて参りたいと思ひます。そして、今の内に一人でも多くの人に、当時の島の様子などを語り継いで行きたいと思っております。私が生まれ育った小さな島、多楽島のことを中心にお話をさせていただきましたが、何か一つでも参考になれば大変有り難いと思ひます。

結びに、埼玉県婦人団体連絡協議会の益々のご発展と、本日お集まりの皆様のご健勝、ご活躍を心から祈念申し上げまして終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

択 捉 島



戦前の
紗那市街



薬取
ポロスハルカルウシの滝

平成23年度
元島民の訴え 北方領土の早期返還を求めて
第22回「元島民の北方領土を語る会」集録

発行／平成24年 2 月

編集／社団法人 北方領土復帰期成同盟

〒060-0031

札幌市中央区北 1 条東 1 丁目

明治安田生命札幌北 1 条東ビル

〔TEL (011)205-6500 FAX (011)205-6501〕

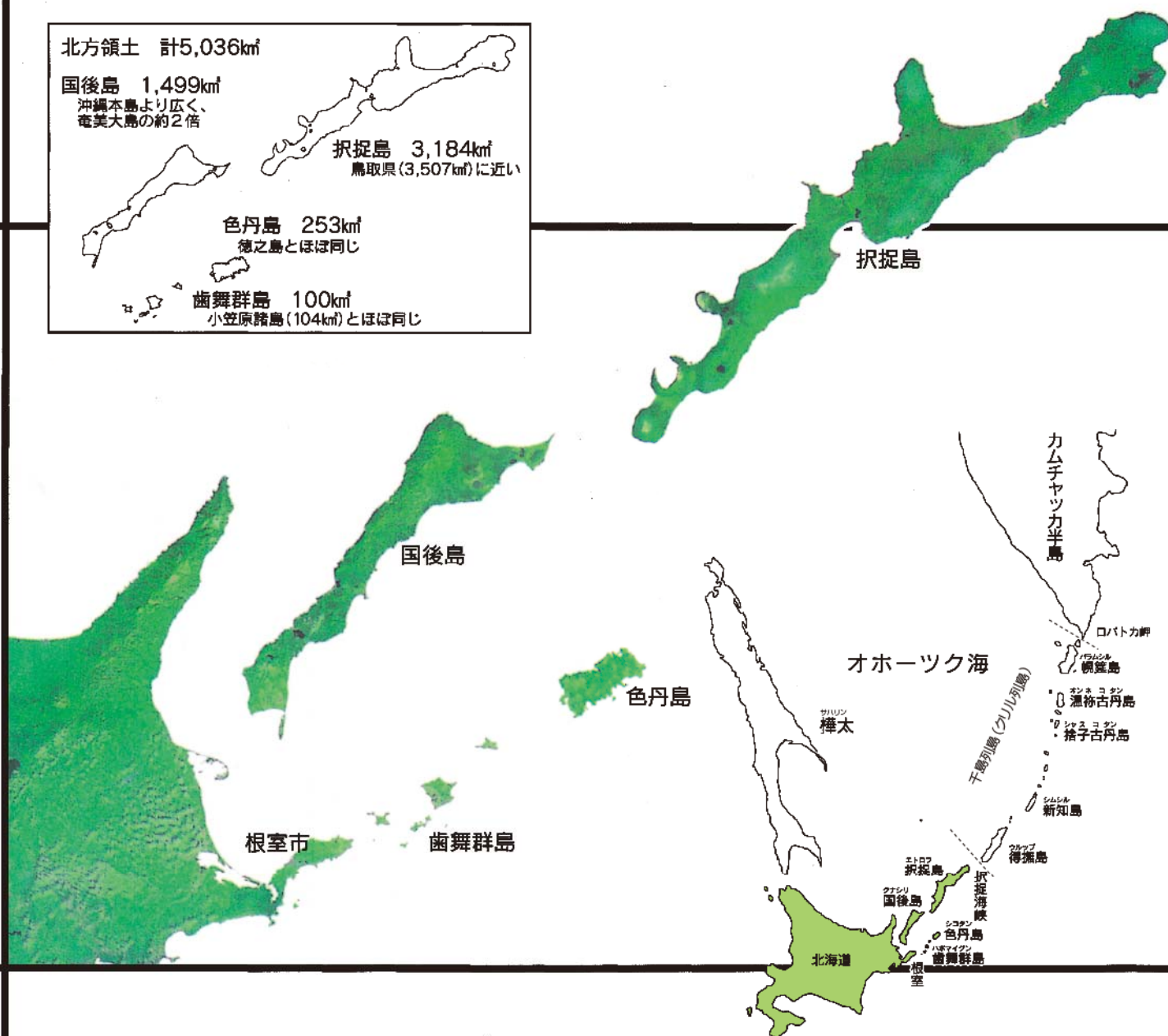
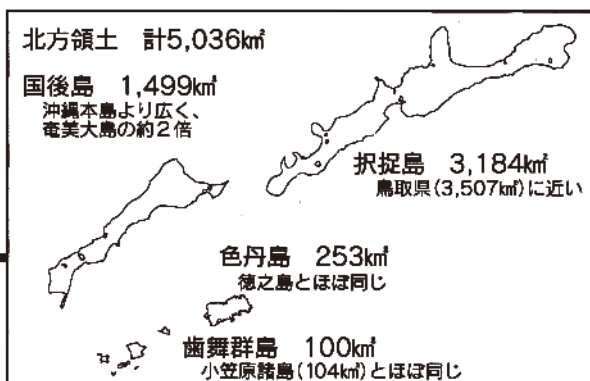
ホームページ：<http://www.hoppou-d.or.jp>

e-mail：hoppou-d@isis.ocn.ne.jp

写真提供 観光 千島歯舞諸島居住者連盟

印刷／株式会社 正文舎

私たちが「北方領土」と呼ぶのは、
えとろふ ぐんご しろたん 歯舞 まい たろく しほ
 択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島(多摩島、志発島、
ゆり あきゆり すいしほ かいから
 勇留島、秋勇留島、水晶島、貝殻島など)の四島です。



“いつか”を“今”に。日本の領土、北方領土

(平成23年度 北方領土問題対策協会最優秀賞標語)